第３章　展示方針の検討

（１）施設ゾーニング計画

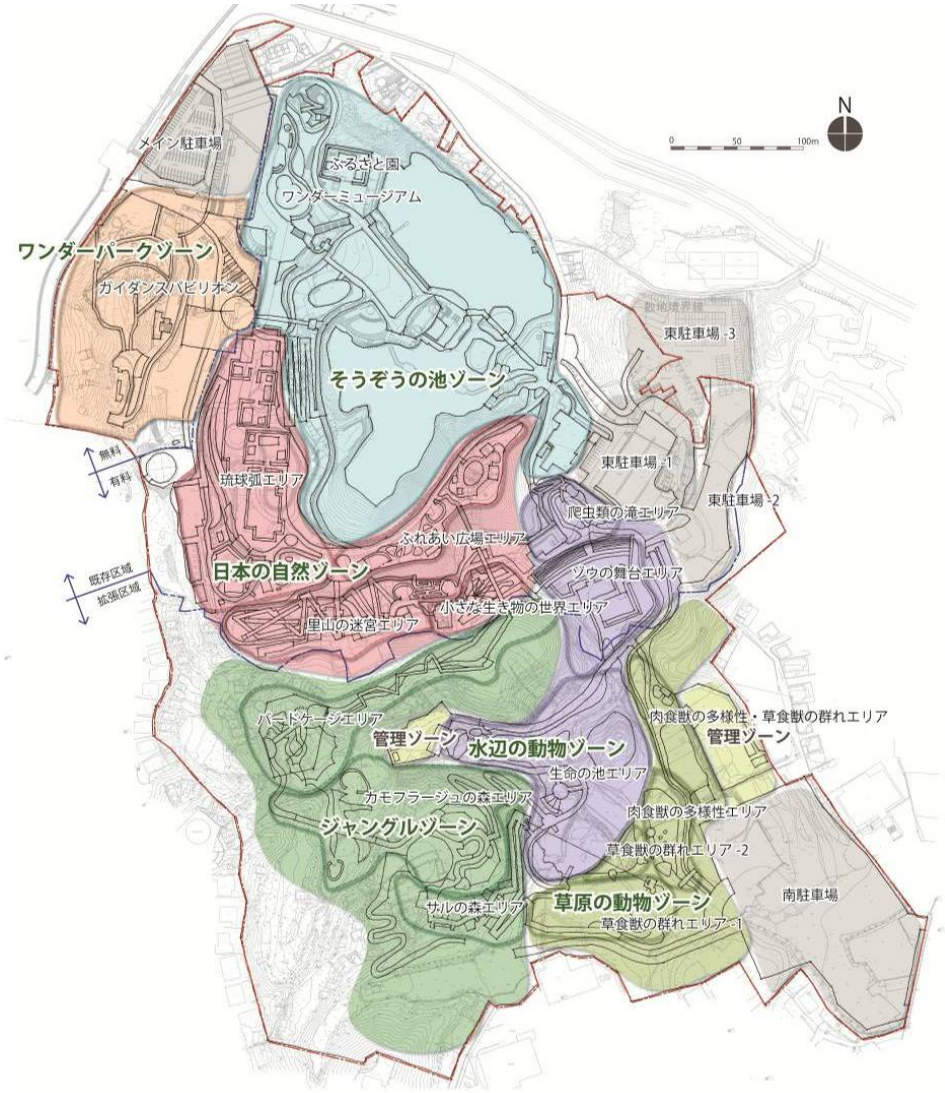
１）ゾーン構成と体験ストーリー

本計画におけるゾーン構成については、「沖縄こどもの国」ならではの気候や地形、植生等の環境要素の活用、現在飼育している動物種の継続、「ワンダーミュージアム」や「ふるさと園」といった既存施設の一体的活用等をふまえ設定する。

各ゾーンは、基本理念である『いのちの縦のつながりを知る。いきることの横のつながりをわかちあう。』が感じられるような特性とそれらのゾーンを巡ることで、得られる体験ストーリーを備えるものとし、「ワンダーパークゾーン」、「日本の自然ゾーン」、「ジャングルゾーン」、「草原の動物ゾーン」、「水辺の動物ゾーン」、「そうぞうの池ゾーン」の六つの展示ゾーンで構成する。

また、あそびを通して多様な気づきや豊かな感性を培う場として、エンターテイメント性を大切にするために、来園者の心を揺さぶる次表のような心理変容も意識した構成とする。

夜間は、昼間とは違う体験や動物の姿が見れるようなナイトズー区域を設定するものとし、ナイトズーに対応した施設や設備を新たに導入しやすい拡張区域をその対象とする。



図：ゾーニング図

表：ゾーン構成と体験ストーリーの考え方

来園者の心理変容	ゾーン名	体験ストーリーの考え方
マインドのリセット	ワンダーパークゾーン	**気軽に楽しめるアイテムの集合** 街との接点となる園の入口部。園内の楽しさが滲み出た多様なアイテムが存在する賑わいエリア。アスレチックや噴水等の遊具、移動式ワゴンによる動物ワークショップ、飲食の屋台など、「遊び」「学び」「食」「文化」など多世代が楽しめ、好奇心を高める要素を展開する広場とし、現在の無料エリアを充実させる。
期待感の醸成	ワンダーパークゾーン（ガイダンスパビリオン）	**ドキドキしながら開く、不思議の国の扉** 無料エリアから有料エリアの世界観をつなぐ、ゲートウェイとなる施設。「いのちの縦のつながり、いきることの横のつながり」を予感させる展示や演出、「沖縄こどもの国をこんな目線で巡ってみよう」と思わせるガイダンスを行う。
気づきと発見の誘発	日本の自然ゾーン	**昔の沖縄体験** 琉球弧の整備が進められている部分及びその周辺を活用し、琉球の自然、昔の家屋、路地等の演出を行いながら、動物との共生の世界を展示、演出する。 動物のみならず沖縄の風習にも焦点をあてた文化提供ゾーンとしても位置づける。
世界観への没入	ジャングルゾーン	**次に何が現れるかわからない探検ゾーン** 拡張区域の既存樹林部。まるで本当のジャングルの中を探検している世界。目をこらし、感覚を研ぎ澄ませながらの体験・体感。すぐ近くに現れる動物たちへのワクワク感や次の動物の気配を察するドキドキ感を提供する。
驚きとまなびの獲得	草原の動物ゾーン	**弱肉強食が繰り広げられる、いきいきした生命の草原ゾーン** 拡張区域の平坦草地部。まるで“弱肉強食”が繰り広げられているような、生命の躍動が息づく世界を表現する。
共感と感動の創出	水辺の動物ゾーン	**いろいろな動物が平等に分け合っている水辺のゾーン** 拡張区域の平坦部でありジャングルゾーンと草原の動物ゾーンの中間地帯。どんな動物も「水」の前には対等で、決して奪い取らない。そんな水辺の平和な姿をみせる。
探究心の喚起	そうぞうの池ゾーン	**癒しの空間でこれからをそうぞうするゾーン** 既存池の水面の広がりの中に佇む事ができる癒しと安らぎの空間で、これまで園内を巡って見て、感じて、体験したものに対して、さらなる探究心を喚起し、私達のこれからを想像、創造する場としていく。

2）動物収集計画

本計画における展示動物種は、既存の飼育動物種や各ゾーンの基本的な考え方に基づき、さらに動物を介して得られる多様ないきる知恵や術、いのちのつながり等を派生テーマとして設定し、それぞれのテーマに適した種を選択する。

世界的に野生動物の入手はもとより、動物園間での動物移動や収集が困難になっている現在の状況をふまえ、繁殖をめざした飼育が必要となってきている。そのため、雌雄各 1 点以上の飼育を基本とする。

なお、本計画においては、候補種とし、今後の具体的な動物展示の設計検討において、入手方法の検討を行いつつ展示種とのその点数を確定する必要がある。

表：各エリアの展示テーマと内容(1/2)

ゾーン		エリア	展示テーマ	内容
日本の自然ゾーン	『身近な自然と文化のつながり』	琉球弧※5	『琉球タイムスリップ』	家畜小屋や畑が備わった沖縄の民家やその暮らしを通して、動物の恩恵や自然に寄り添い、いのちに感謝してきた文化を知る。
		ふれあい広場	『僕らの遊び仲間』	愛玩動物等は、一緒に遊んだり安らぎや癒しをもたらしてくれるかけがえのない仲間であることを感じる。
		里山の迷宮	『里山の動物ごっこ』	沖縄にはない「里山」という人と自然の共生の姿を紹介。そこに棲む動物達は、かつては共に暮らしてきた動物であり、下草刈等手入れされた里山ではいろいろな動物に出会うことができた。その世界に迷い込んで、動物の性質を探ってみる。
		小さな生き物の世界	『小さな生き物の感覚体験』	小さくて気づかないこともある身近な生き物達。彼らの目線の世界を通して、その存在や生物多様性の底辺を支える小さくても大切ないのちを感じる。
ジャングルゾーン	『多様性と進化のつながり』	バードケージ	『森のにぎやかな住人達』	全世界の半数以上の生物が生息するといわれるジャングル。これを可能にした森の上下方向の棲み分け等、共存共栄のしくみを感じる。
		カモフラージュの森	『いきるための生活戦略』	多くのいのちがひしめく森では、いきていくために進化の過程で多様な戦略を身につけた。これらを知ることで自然に対する観察力や探究心を養う。
		サルの森	『森の賢者とくらべっこ』	森で暮らしていた私たちの祖先（原猿類～類人猿）から人へと進化し、発達した能力を知ることで、人間らしさとは何かを考えるきっかけを提供する。

※5 琉球弧とは、九州の南から約 1,260ｋｍの洋上にかけて弧状に連なる島列をさす。

表：各エリアの展示テーマと内容(2/2)

ゾーン		エリア	展示テーマ	内容
草原の動物ゾーン	『食べる事を通した命のつながり』	草食獣の群れ	『みんなでいき抜く』	栄養価の低い過酷な草地環境の中で、いき抜くための群れ社会や食物の食べ分け等を通して、食べることといきることの大切さを感じる。
		肉食獣の多様性	『食べ物で変わる姿』	草食獣と肉食獣が食べるものの違いによって発達した体の仕組みが違うこと、食う食われるの関係である生態系等を通して、地球上に存在するいのちは食べることで繋がっていることを知る。
水辺の動物ゾーン	『歩みをともにするつながり』	生命の池	『いのちが集う水辺』	いきる上で欠かせない水。森の動物も草原の動物も水を求めて集まってくる姿、平等に水を分け合っている姿を通して、貴重な水の存在や水を介した共存関係を感じる。
		爬虫類の滝	『生きた化石とその仲間たち』	恐竜と同じ時代を生き抜いた「生きた化石」としてのワニを中心に、その仲間である爬虫類の多様な形態と特性を紹介する。 また、同時代を生きていた恐竜の絶滅と現代の絶滅の危機にある生物の要因の違いを知る。
		ゾウの舞台	『人と動物の絆』	人と野生動物が深い絆でつながっている世界を象徴するゾウのトレーニングの実演空間。ゾウと人のコミュニケーションを体感するとともに、ゾウ使いとゾウが長い歴史の中で積み重ねてきた関係や絆に触れる。
そうぞうの池ゾーン	『わたしたちの未来へつなぐ』	そうぞうの池	『つながりの想像』	水面に浮かぶ船に乗りながら、豊かな緑と水辺の環境に浸り、生き物とのふれあいを通して、園内で体験し感じた生命の輝き、生命の繁栄と共存の歴史、自然との共生について考える機会を提供する。
		ふるさと園	『沖縄の風水思想と暮らし』	ふるさと園や周辺のビオトープ施設を活用し、沖縄の環境共生の体験の場としてさらに充実させていく。
		ワンダーミュージアム	『科学を通した未来の創造』	ワンダーミュージアムを活用し、これからの環境共生にも視野を広げる様々なワークショップや体験を付加し充実させていく。

表：各ゾーンの展示動物候補種（1/3）

（※印はワシントン条約による緊急保護収容動物）　網掛け部は新規導入候補種

ゾーン	エリア	分類	動物名	平成27年3月現在				備考
				♂	♀	不明	計	
日本の自然ゾーン	琉球弧	哺乳類	琉球犬	0	1	0	1	
		〃	大東犬	1	0	0	1	
		〃	ヨナグニウマ	2	1	0	3	
		〃	イノシシ（リュウキュウイノシシ）	1	0	0	1	
		〃	アグー（沖縄在来豚）	1	2	0	3	
		〃	ロ之島牛	1	0	0	1	
		〃	ヤギ（ヒージャー）	4	5	0	9	
		〃	ヤクシマザル	4	4	0	8	
		〃	ケラマジカ					琉球弧の固有亜種として導入を検討
		〃	ダイトウオオコウモリ	1	1	0	2	
		〃	オリイオオコウモリ	35	27	0	62	
		〃	ヤエヤマオオコオモリ	0	1	0	1	
		鳥類	ズアカアオバト	2	2	1	5	
		〃	リュウキュウオオコノハズク	1	1	1	3	
		〃	アカショウビン（亜種不明）	3	1	0	4	
		〃	オシドリ	3	1	1	5	
		〃	カンムリワシ（沖縄産）	4	2	0	6	
		〃	カラスバト	5	4	1	10	
		〃	ウタイチャーン（沖縄在来種）	1	0	0	1	
		〃	インディアンランナー	1	0	0	1	
		〃	バリケン（バリケン雑）	0	3	0	3	
		〃	ムナグロ	0	0	1	1	
		〃	ダイトウコノハズク	1	0	0	1	
		〃	リュウキュウコノハズク	0	3	0	3	
		爬虫類	セマルハコガメ（亜種不明）	15	69	21	105	
		〃	セマルハコガメ（亜種不明）×リュウキュウヤマガメ	2	1	0	3	
		〃	ミナミイシガメ×リュウキュウヤマガメ	1	0	1	2	
		〃	オキナワキノボリトカゲ	1	1	0	2	
		〃	サキシマキノボリトカゲ	1	0	0	1	
		〃	サキシママダラ	1	1	0	2	
		〃	アカマタ	4	1	0	5	
		〃	サキシマスジオ	1	0	0	1	
		〃	ヨナグニシュウダ	0	0	1	1	
		〃	サキシマバイカダ	0	0	0	0	
		〃	ヒメハブ	0	0	7	7	
		〃	リュウキュウヤマガメ	30	35	3	68	
		〃	アオカナヘビ	3	2	0	5	
		〃	ヘリグロヒメトカゲ	0	1	0	1	
		〃	キシノウエトカゲ	2	2	18	22	
		〃	イシガキトカゲ	3	1	0	4	
		〃	オキナワトカゲ	1	0	0	1	
		〃	リュウキュウハブ	0	0	13	13	
		両生類	ミヤコヒキガエル	3	0	0	3	
		〃	ヒメアマガエル	0	0	1	1	
		〃	ハロウェルアマガエル	0	0	1	1	
		〃	オキナワアオガエル	0	0	40	40	
		〃	ヌマガエル	1	1	2	4	
		〃	サキシマヌマガエル	1	1	5	7	
		〃	シリケンイモリ	3	1	0	4	
		〃	ハナサキガエル	3	3	63	69	
		〃	リュウキュウアカガエル	1	0	0	1	
		〃	リュウキュウカジカガエル	0	0	3	3	
		昆虫	ヤエヤマツダナナフシ	0	4	0	4	
	ふれあい広場	哺乳類	ヨーロッパケナガイタチ（フェレット）	0	1	0	1	
		〃	テンジクネズミ雑（モルモット）	0	0	37	37	
		〃	カイウサギ雑	0	0	40	40	
			フレミッシュジャイアント	1	0	0	1	
		〃	サイシュウバ	1	2	0	3	
			ケナガネズミ	1	1	0	2	
		〃	リャマ					家畜種として導入を検討
		〃	ヒツジ					家畜種として導入を検討
		〃	イヌ					愛玩動物として導入を検討
		鳥類	インコ					愛玩動物として導入を検討
		〃	アヒル					家畜種として導入を検討
		爬虫類	アルダブラゾウガメ	0	0	3	3	
	里山の迷宮	哺乳類	ニホンツキノワグマ	0	1	0	1	
		〃	イタチ					樹上を利用する種として導入を検討
		〃	テン					樹上を利用する種として導入を検討
		〃	ムササビ					樹上を利用する種として導入を検討
		〃	モモンガ					樹上を利用する種として導入を検討
		〃	ホンドリス					樹上を利用する種として導入を検討
		鳥類	キジバト	2	1	2	5	
		〃	チョウゲンボウ	1	0	0	1	
		〃	ハヤブサ	1	0	0	1	
		哺乳類	タヌキ（ホンドタヌキ）	0	1	0	1	
		〃	ホンドギツネ	1	1	0	2	
		〃	ベンガルヤマネコ（ツシマヤマネコ）	1	0	0	1	
		〃	ニホンジカ雑（ハナジカ×ニホンジカ）	0	6	0	6	
		鳥類	サシバ	0	0	3	3	
		〃	キジ					地上を利用する種として導入を検討
		〃	ヤマドリ					地上を利用する種として導入を検討

表：各ゾーンの展示動物候補種（2/3）

（※印はワシントン条約による緊急保護収容動物）　網掛け部は新規導入候補種

ゾーン	エリア	分類	動物名	平成27年3月現在 ♂	♀	不明	計	備考
ジャングルゾーン	バードケージ	哺乳類	リスザル（コモンリスザル）	2	3	0	5	
		〃	フクロモモンガ	2	3	0	5	
		鳥類	インドクジャク（雑）	1	1	0	2	
		〃	キツツキ類					森の音（ドラミング※6）や樹上を利用する種として導入を検討
		〃	インコ類					鮮やかな色で樹上を利用する種として導入を検討
		〃	キジ類					鮮やかな色で地上を利用する種として導入を検討
	カモフラージュの森	哺乳類	ベンガルヤマネコ（アムールヤマネコ）	1	1	0	2	
		〃	ベンガルトラ					擬態模様を持つ種として導入を検討
		〃	アクシスジカ					擬態模様を持つ種として導入を検討
		〃	ジャガー					擬態模様を持つ種として導入を検討
		爬虫類	グリーンイグアナ	1	3	0	4	
		鳥類	アオバズク					擬態模様を持つ種として導入を検討
	サルの森	哺乳類	エリマキキツネザル（亜種不明）	0	1	0	1	
		〃	ワオキツネザル	1	0	0	1	
		〃	レッサースローロリス（ピグミースローロリス）※	3	1	2	6	
		〃	フサオマキザル	1	1	0	2	
		〃	マンドリル	1	0	0	1	
		〃	ヒヒ類					旧世界ザル※7、森と草原とを利用するサルとして導入を検討
		〃	ジェフクロイクモザル（アカクモザル）	2	0	0	2	
		〃	アカテタマリン	1	0	0	1	
		〃	チンパンジー	1	0	0	1	
		〃	オランウータン					人に近い類人猿として導入を検討
		〃	ゴリラ					人に近い類人猿として導入を検討
		〃	テナガザル					人に近い類人猿として導入を検討
草原の動物ゾーン	草食獣の群れ	哺乳類	アミメキリン	0	2	0	2	
		〃	パタスザル	0	1	0	1	
		〃	シマウマ					サバンナの代表種として導入を検討
		〃	サイ					サバンナの代表種として導入を検討
		〃	ガゼル					サバンナの代表種として導入を検討
		〃	インパラ					サバンナの代表種として導入を検討
		〃	ヌー					サバンナの代表種として導入を検討
		鳥類	ダチョウ（亜種不明）	1	3	0	4	
		〃	コミミズク	0	0	1	1	
		哺乳類	オオカンガルー	1	5	0	6	
		〃	プレーリードック					地中生活をする種として導入を検討
		鳥類	エミュー	2	1	3	6	
		爬虫類	エロンガータリクガメ	2	1	1	4	
		〃	ケヅメリクガメ	2	1	7	10	
		〃	ホルスフィールドリクガメ（ヨツユビハコガメ）	1	1	0	2	
		〃	フトアゴヒゲトカゲ	1	0	0	1	
		〃	エジプトトゲオアガマ	0	0	0	0	
		〃	ヒョウモントカゲモドキ	1	2	2	5	
		昆虫	スカベラ類					生態系の分解者として導入を検討
	肉食獣の多様性	哺乳類	ライオン（亜種不明）	0	1	0	1	
		〃	ジャワマングース	1	0	0	1	
			オオアリクイ	1	2	0	3	
		〃	ハイエナ					サバンナの代表種として導入を検討
		〃	チーター					サバンナの代表種として導入を検討
		〃	ジャッカル					サバンナの代表種として導入を検討
		〃	ミーアキャット					サバンナの代表種として導入を検討
		鳥類	ハゲタカ					生態系の分解者として導入を検討

※6 ドラミングとは動物が鳴き声以外の方法で音をたてる動作をいう。
※7 旧世界ザルとはアジアやアフリカといった旧大陸に生息するサル類を指す。

表：各ゾーンの展示動物候補種（3/3）

（※印はワシントン条約による緊急保護収容動物）　網掛け部は新規導入候補種

ゾーン	エリア	分類	動物名	平成27年3月現在 ♂	♀	不明	計	備考
水辺の動物ゾーン	生命の池エリア	哺乳類	カニクイザル※	0	1	0	1	
		〃	カバ	0	2	0	2	
		〃	アライグマ	0	1	0	1	
		〃	カピバラ					水辺で生活する種として導入を検討
		〃	ナマケモノ					陸上と水中で動きのすばやさに大きな違いのある種として導入を検討
		〃	ビーバー					水中に特殊な巣をつくる種として導入を検討
		〃	カワウソ					水辺で生活する種として導入を検討
		鳥類	アマサギ	0	0	2	2	
		〃	ミサゴ	1	0	1	2	
		〃	シロハラクイナ	1	1	0	2	
		〃	ダイシャクシギ	0	0	0	0	
		〃	チュウシャクシギ	0	0	1	1	
		〃	モモイロペリカン	1	1	0	2	
		〃	カワウ	1	1	1	3	
		〃	ゴイサギ	0	0	1	1	
		〃	コクチョウ	0	2	17	19	
	爬虫類の滝	爬虫類	ガビアルモドキ（マレーガビアル）	0	2	0	2	
		〃	ミシシッピーアリゲーター	0	0	2	2	
		〃	メガネカイマン（パラグアイメガネカイマン）	2	1	1	4	
		〃	シャムワニ	2	0	0	2	
		〃	ワニガメ	1	0	5	6	
		〃	フロリダスッポン	1	0	0	1	
		〃	ヒョウモンガメ（亜種不明：ヒョウモンリクガメ）	1	0	0	1	
		〃	ボールニシキヘビ	2	0	0	2	
		〃	シマヘビ	0	0	1	1	
		〃	アカダイショウ（コーンスネーク）	4	1	2	7	
		〃	インドニシキヘビ（ビルマニシキヘビ）	0	0	1	1	
		〃	シロクチニシキヘビ（アルバーティスパイソン）	1	0	0	1	
		〃	セマルハコガメ（亜種不明）	15	69	21	105	
		〃	スペングラーヤマガメ※	0	1	0	1	
		〃	アメリカハコガメ（ミツユビハコガメ）	1	1	4	6	
		〃	ムツアシガメ	1	2	0	3	
		〃	バンデットテグー（キクテグー）	0	0	1	1	
		〃	ケイアオジタトカゲ	0	0	1	1	
		〃	ミズオオトカゲ	1	0	0	1	
		〃	サンビームヘビ	0	0	1	1	
		〃	アオダイショウ	0	0	2	2	
		〃	タイワンスジオ	0	0	2	2	
		〃	ブラックラットスネーク	0	0	0	0	
		〃	ヌマヨコクビガメ	0	0	2	2	
		〃	クロヨコクビハコガメ	0	0	3	3	
		〃	クサガメ	7	15	13	35	
		〃	マレーハコガメ	3	2	0	5	
		〃	デンタータマルガメ（ノコヘリマルガメ）	0	5	0	5	
		〃	ミシシッピーチズガメ	0	1	0	1	
		〃	オオヤマガメ（グランディスヤマガメ）	0	0	3	3	
		〃	ヒジリガメ（アナンダイルガメ）	1	0	0	1	
		〃	ニホンイシガメ	0	7	0	7	
		〃	ミナミイシガメ	0	0	68	68	
		〃	ハナガメ（スジガメ）	3	4	11	18	
		〃	フロリダガメ	0	0	2	2	
		〃	ギアナヤマガメ（アシボチヤマガメ）	0	1	0	1	
		〃	アカミミガメ（ミシシッピーアカミミガメ）	0	0	136	136	
		〃	クモノスガメ	0	1	0	1	
		〃	ミツユビコンゴーイール（ミツユビアンフューマ）	0	0	1	1	
		〃	カリフォルニアキングスネーク	1	1	2	4	
		〃	インドシナウォータードラゴン	1	0	0	1	
		〃	エボシカメレオン	7	1	4	12	
		〃	ミルクヘビ（ホンジュランスミルクスネーク）	0	0	1	1	
	ゾウの舞台	哺乳類	アジアゾウ（インドゾウ）	1	2	0	3	
そうぞうの池ゾーン	そうぞうの池	鳥類	ダイサギ	0	0	1	1	
		魚類	オオウナギ	0	0	1	1	
		〃	ギンブナ	0	0	5	5	
		〃	メダカ	0	0	20	20	
		〃	タウナギ	0	0	1	1	
		〃	タイワンキンギョ	0	0	2	2	
		両生類	イモリ					沖縄の水辺の生き物として導入を検討
		甲殻類	サワガニ					沖縄の森の拡散者として導入を検討

（２）動線計画

本計画における動線計画についての基本的な考え方を次のように設定する。

○園内を巡る来園者主動線のユニバーサル動線化

観覧者動線として、園内の各展示エリアや施設を巡る主動線は、基本的に幅員 4m以上4%勾配以下(やむを得ない場合は 5%以下)の園路とする。ただし、本園は地形の高低差が著しいため、勾配園路が長くなる箇所には、補助的にエレベータの設置を検討するとともに、電動カートの導入や園内スタッフ、ボランティアによる介助等、運営面での対応も検討する。

○体験ストーリーに沿ったお薦め順路の設定と一筆書き動線の確保

ゾーン毎に設定された特性や展示テーマをストーリーとして体験できるお薦めの一筆書き動線を確保すると共に、来園者の興味や時間等により選択的に巡ることを可能にするショートカット動線も確保する。

○あそびながら、気づきやまなびにつながるアドベンチャー動線の導入

アスレチック遊具がオプショナル動線となり、あそびながら動物の特性に気づいたり、こども同士があそびを通して冒険心や助け合いの心、危険察知の能力等、いきる上で大切な能力を培うことができるユニークな動線を確保する。

○快適性やエンターテイメント性の高い乗り物（ライド）の導入

歩行動線とは異なる楽しみが付加され、高齢者や身障者が負担なく利用でき、またツアー客等限られた時間での施設利用等へも対応できるアトラクション型の乗り物（以下、「ライド」とする。）を導入する。

＜ライドの案＞

- **空中ライド**：地球規模のグローバルな視点で、園内の水辺、樹林、草原等の自然環境と動物の姿を、空中から俯瞰しながら観覧できるライド。
- **バリア型ライド**：乗物自体で安全性を確保しつつ、猛獣等に極力近づくことができるライド。
- **ボートライド**：水上を浮遊する穏やかな憩いの時を楽しむライド。
- **地上ライド**：園内の快適な移動を可能にする車両型ライド。車両内では解説や園内情報などを提供する。

○ナイトズー（夜間開園）におけるスペシャルツアー

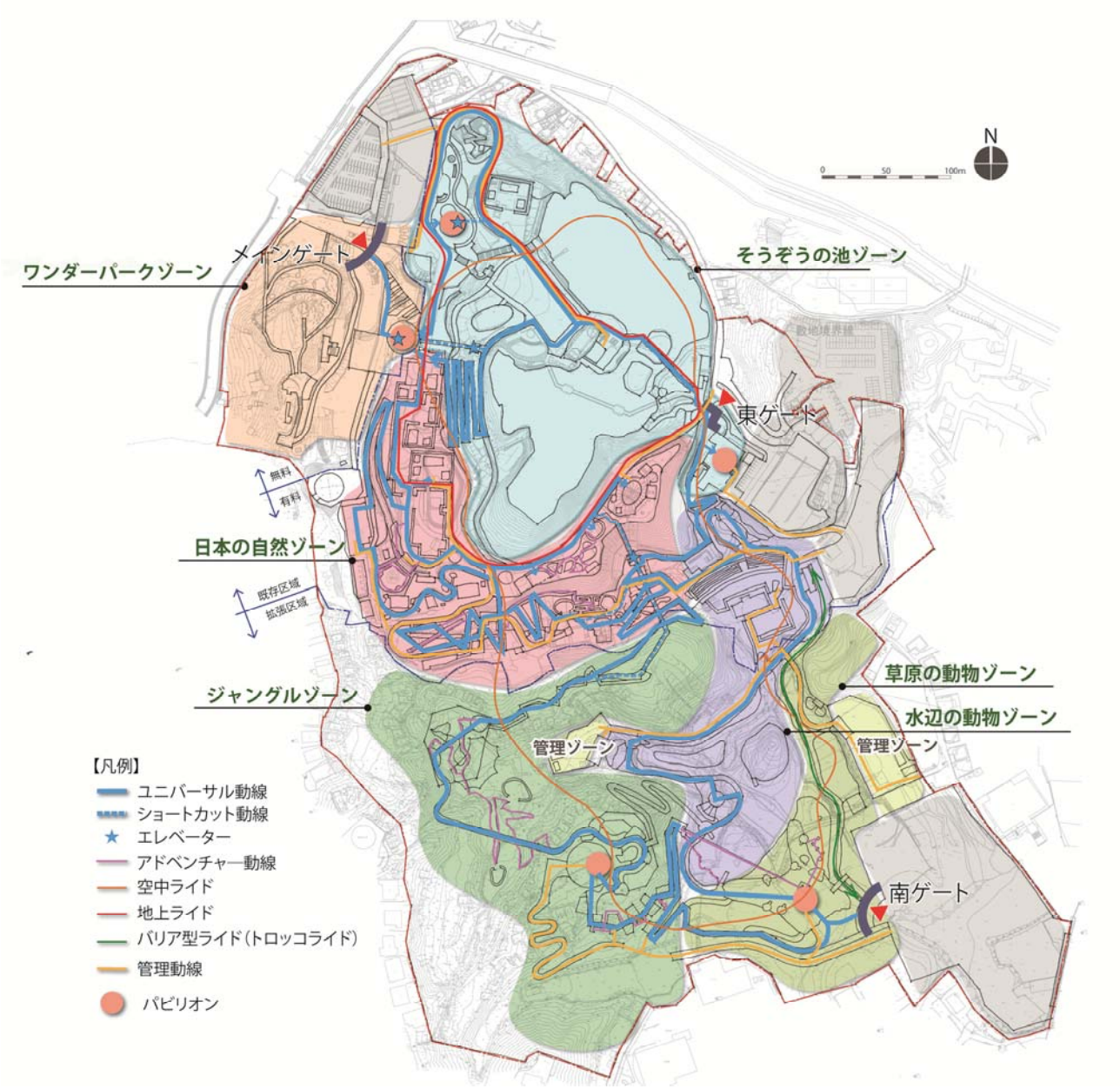
昼間と異なる視点から動物の姿を楽しむことができるようなツアー動線を設定する。草原の動物ゾーンや水辺の動物ゾーンでは、水上を移動しながら観覧するルート、ジャングルゾーンでは、通常の園路以外の場所を解説員と共に展示動物だけでなく、沖縄の樹林に生息する生き物も観察しながら巡るルート等も考えられる。

○観覧者動線と管理用動線の分離

観覧者動線と管理用動線は、極力分離し、来園者の安全性の確保や世界観への没入を妨げないようにする。

○工事期間中の動線の確保

開園しながらの工事とすることから、工事区域を除く範囲で、利用者の安全性に配慮した迂回ルートを設定し、極力一巡ルートの確保に努める。



※ここでのパビリオンは、屋内型の展示機能を持つ空間を意味する。

図：動線計画図

（３）各ゾーンの展示計画

１）基本的な考え方

各ゾーンの展示計画にあたり、先の整備展開の方向性や展示演出の考え方に基づき、あそびの視点や発想を軸とした知識習得の新しい姿を展開する。以下に、動物展示に関わる基本的考え方を整理する。

■人と動物の境界を感じさせない、動物がいることがあたり前の世界または動物の世界に入り込むという感覚の世界観を展開する

・動物の生息環境である自然要素が十分に感じられる環境の形成
・極力柵や檻、獣舎等の存在を感じさせない動物展示空間の形成

■動物がいるあたり前の世界から､“あたりまえを越えた自然な驚き･発見“が提供される体験を展開する

・遊びから自然に学べる、楽しみながら学べる工夫の導入
・動物との出会い方への工夫の導入

■動物の特性や動き等、いきいきとした姿が繰り広げられる世界観を展開する

・動物の動きを誘発する工夫の導入
・観賞だけでない “参加”により人と動物のコミュニケ―ションが図られる機会の提供

■記憶に残りまた訪れたくなる、さらなる興味や学びの深化が可能な施設構成や機能展開を図る

・実物の動物展示では紹介しきれない知識等を補完、拡充し、さらなる興味への受け皿となるパビリオン(博物館機能)の導入
・親子、多世代での会話がうまれるような展示解説の工夫
・ワークショップや多様なプログラムメニューの充実

２）展開のあり方

上記の基本的な考え方をふまえ、各ゾーンの展示展開及び主要施設イメージを次項以降に示す。

①ワンダーパークゾーン

【概　要】

街との接点となる園の入口部。園内の楽しさが滲み出た多様なアイテムが存在する賑わいエリア。アスレチックや噴水等の遊具、移動式ワゴンによる動物ワークショップ、飲食の屋台など、「遊び」「学び」「食」「文化」など多世代が楽しめ、好奇心を高める要素が展開される広場とし、現在の無料エリアを充実させる。

■無料エリア

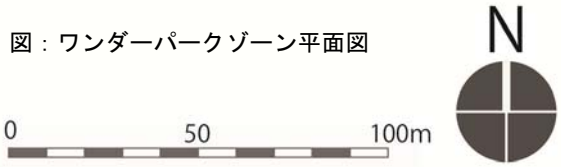
【エントランスゲート】

・現在のメインエントランスは駐車場の地盤より低いため、エントランスの存在がわかりにくく、階段でのアクセスが中心となっている等の課題を抱えている。
・そのため、駐車場からわかりやすい新たなゲートを設けると共に、メインエントランスとして園内のガイダンスを行うパビリオン、パビリオンまでは、噴水遊具やアスレチックにより来園者を誘導する。
・エントランスゲート周辺の無料エリアでは、飲食・物販のワゴンショップ等が出店できるスペースや移動動物園スタイルのワークショップ等ができるスペースを確保し、噴水遊具と共に入口空間のさらなる賑わいを演出する。

【ガイダンスパビリオン】

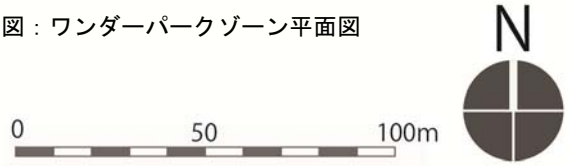
・「沖縄こどもの国」を象徴するパビリオン。無料エリアから有料エリアの世界観をつなぐ、ゲートウェイとなる施設。「いのちの縦のつながり、いきることの横のつながり」を予感させる展示や演出、「沖縄こどもの国をこんな目線で巡ってみよう」と思わせるようなガイダンスを行う。
・このガイダンスパビリオンから、展示を見ながら快適に上下方向の移動ができ、入園可能なしくみとする。
・展示ホール、総合インフォメーション、サービスセンター、ショップ、飲食施設、空中ライドの駅等で構成する。
・飲食施設は、無料エリアからも利用できるものとし、観光客の立ち寄り利用を視野に入れた、ファストフードや麺類、丼物等の専門単品メニューの「ご当地料理」フードコート。
・現況のチルドレンズセンターにおける管理運営拠点機能や事務機能の諸室は、ガイダンスパビリオン内に確保する。

図：ワンダーパークゾーン平面図



■便益サービス施設配置

図：ワンダーパークゾーン平面図



②日本の自然ゾーン

【概　要】

「身近な自然と文化のつながり」を感じてもらうゾーン。沖縄の家畜や琉球弧の生き物に焦点を当てた「琉球弧エリア」、ペットなどの愛玩動物や家畜とふれあう「ふれあい広場エリア」、人と共生してきた日本の里山の動物達に出会う「里山の迷宮エリア」、身近な生き物である昆虫などの小さないのちの気持ちになる「小さな生き物の世界エリア」の四つのエリアで構成される。

【琉球弧エリア】

・古い時代にタイムスリップしたかのような世界が展開される。家畜との共生等、かつての沖縄の暮らしを再現し、沖縄の食や芸能が体験できる。それらの体験を通して、動物の恩恵や自然に寄り添い、いのちに感謝してきた文化を知る。 坂道に配置された既存の琉球弧の動物達は、本エリアで展示するため、既存獣舎の一部は休憩所等への転用を検討する。

＜琉球弧の森＞

・既存のアークおきまるの建物を活用し、沖縄の自然を中心に紹介する展示施設。独自の進化を遂げた固有種をやんばるの森に入り込んだような感覚で視覚や聴覚を研ぎ澄ませながら見つけていく。森の中では、オオコウモリになりきり、コウモリの目線で逆さの世界を体験することもできる。

＜シカの岩登り、ヤクザルアスレチック＞

・シカパドックやヤクザルパドックの周辺では、動物の動きや能力をあそびながら体感できる遊具、ヤクザルの動きを誘発したりコミュニケーションを楽しむ遊具を導入する。

【ふれあい広場エリア】

・「僕らの遊び仲間」をテーマに、小動物や愛玩動物たちに触れたり、一緒にあそぶ中で、動物達と仲良く暮らすための知識にふれる。
・トリマーや獣医等の動物に係る様々な職業体験メニューを提供する。
・エリア内には、傷病鳥獣舎を併設し、獣医体験の一環としても紹介、活用できるようにする。また、本施設を短期的にはホワイトライオンの展示場として利用し、草食の動物ゾーン完成後ライオンが移動した後には、展示場部分をレクチャースペース等に活用する。
・親は子供が遊んでいる間、イヌやネコと気軽にふれあいながらくつろげる、ふれあいカフェを設ける。

【里山の迷宮エリア】

・「里山の動物ごっこ」をテーマに、沖縄にはない「里山」という人と動物の共生の姿を紹介し、そこに暮らす動物たちは、昔話や絵本に登場し、人にとって身近な動物、共に暮らしてきた動物であったことを知ってもらう。

・一般園路と並走するアドベンチャー動線に配置される遊具で動物の性質や能力、行動等を遊びながら学ぶことで、動物たちの特徴を知りつつ、下草刈り等手入れされた里山ではいろんな動物に出会えることを体験する。

【小さな生き物の世界エリア】

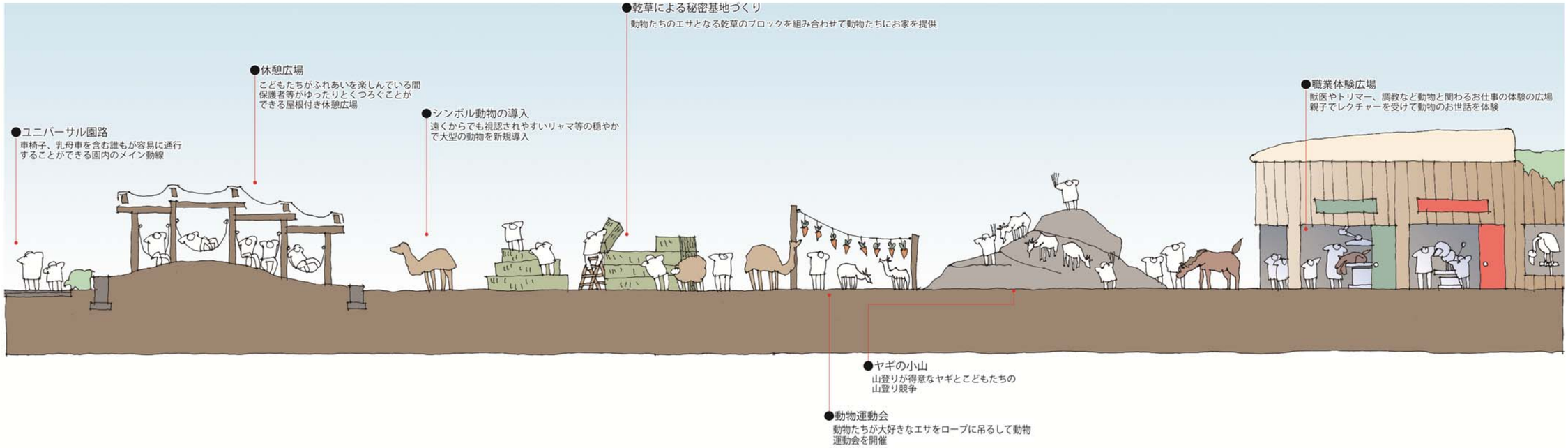
・「小さな生き物の感覚体験」をテーマに、小さくて気づかないこともあるクモや虫たちの目線の世界を通して、小さくてもいきている生命を感じる。
・クモや昆虫等の巨大なオブジェ遊具で遊びながら、サナギや羽化の体験、クモの巣ネットからの脱出、不思議な目の見え方等、小さな生き物のいきる世界を体験できる。

図：日本の自然ゾーン平面図

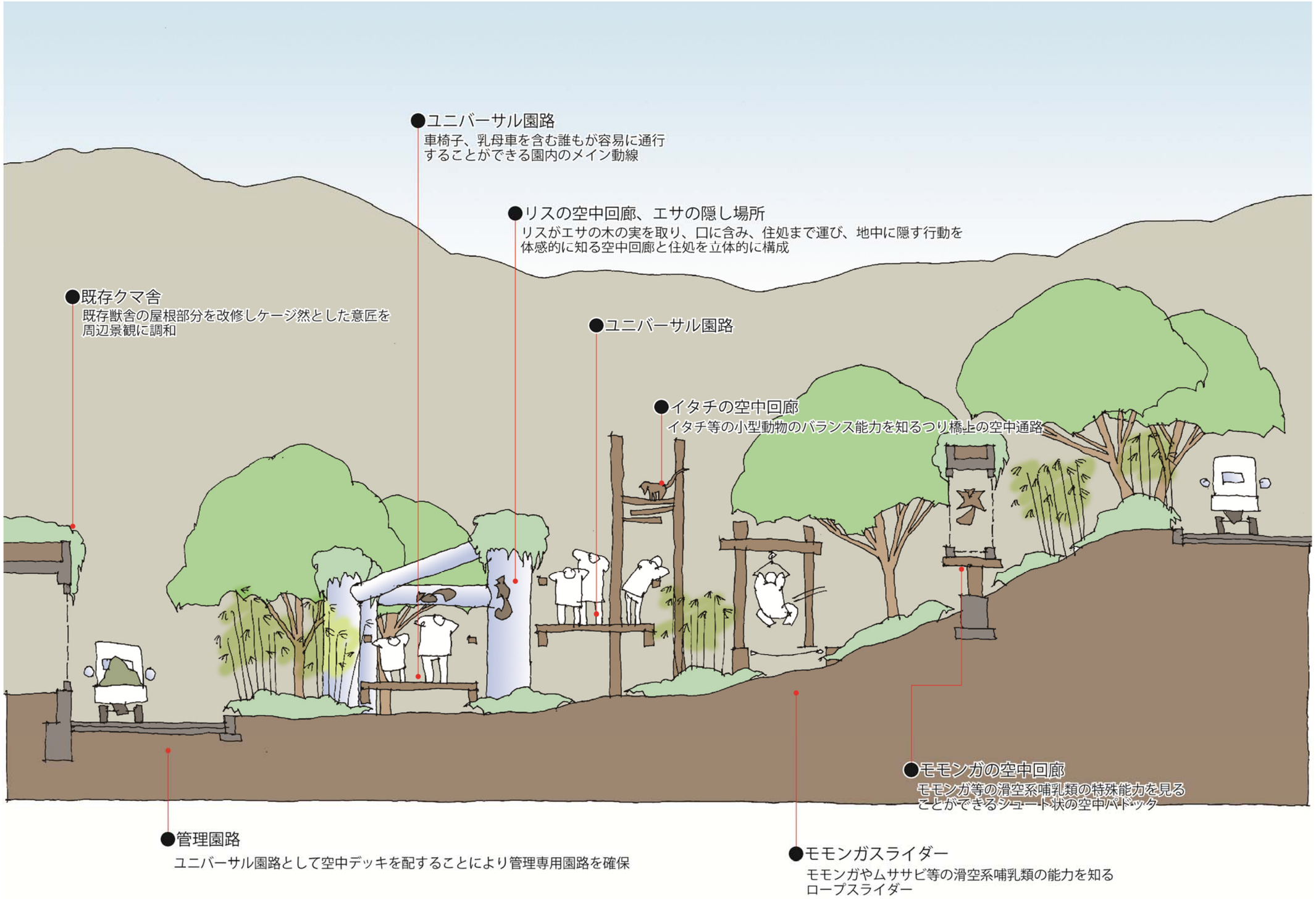
琉球弧エリアイメージパース

里山の迷宮エリアイメージパース

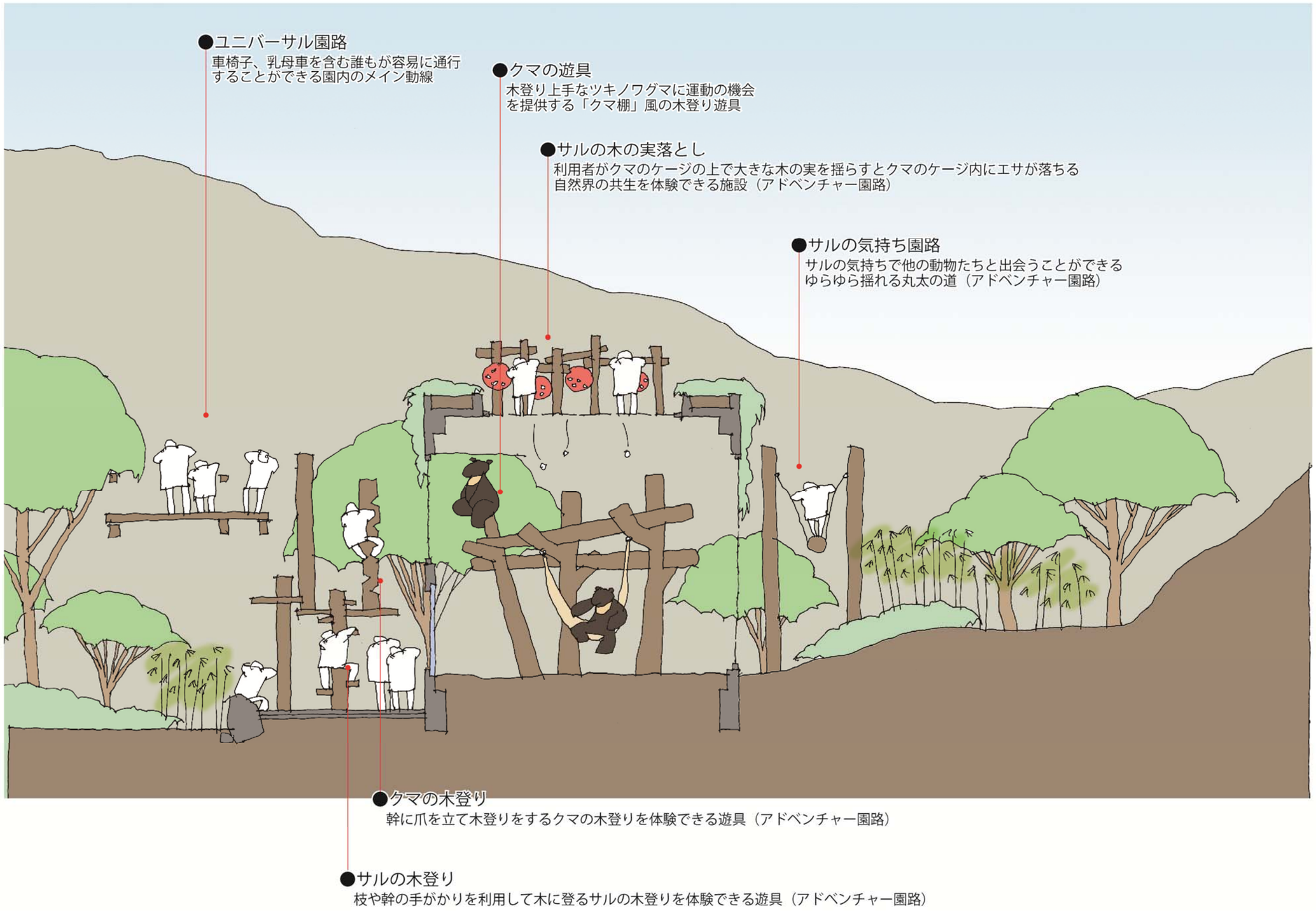
【ふれあい動物エリア】－断面図 A



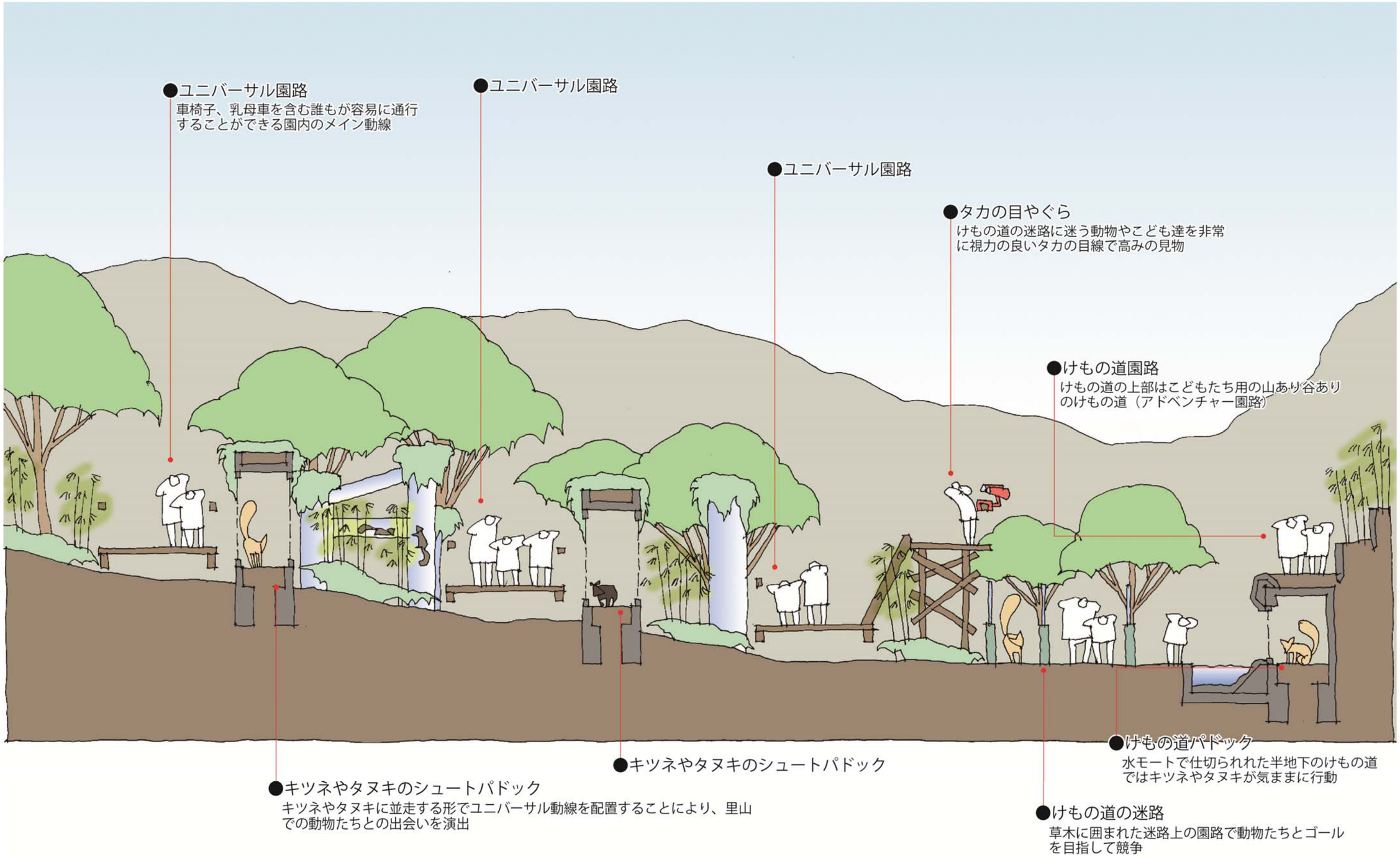
【里山の迷宮エリア-1】－断面図 B



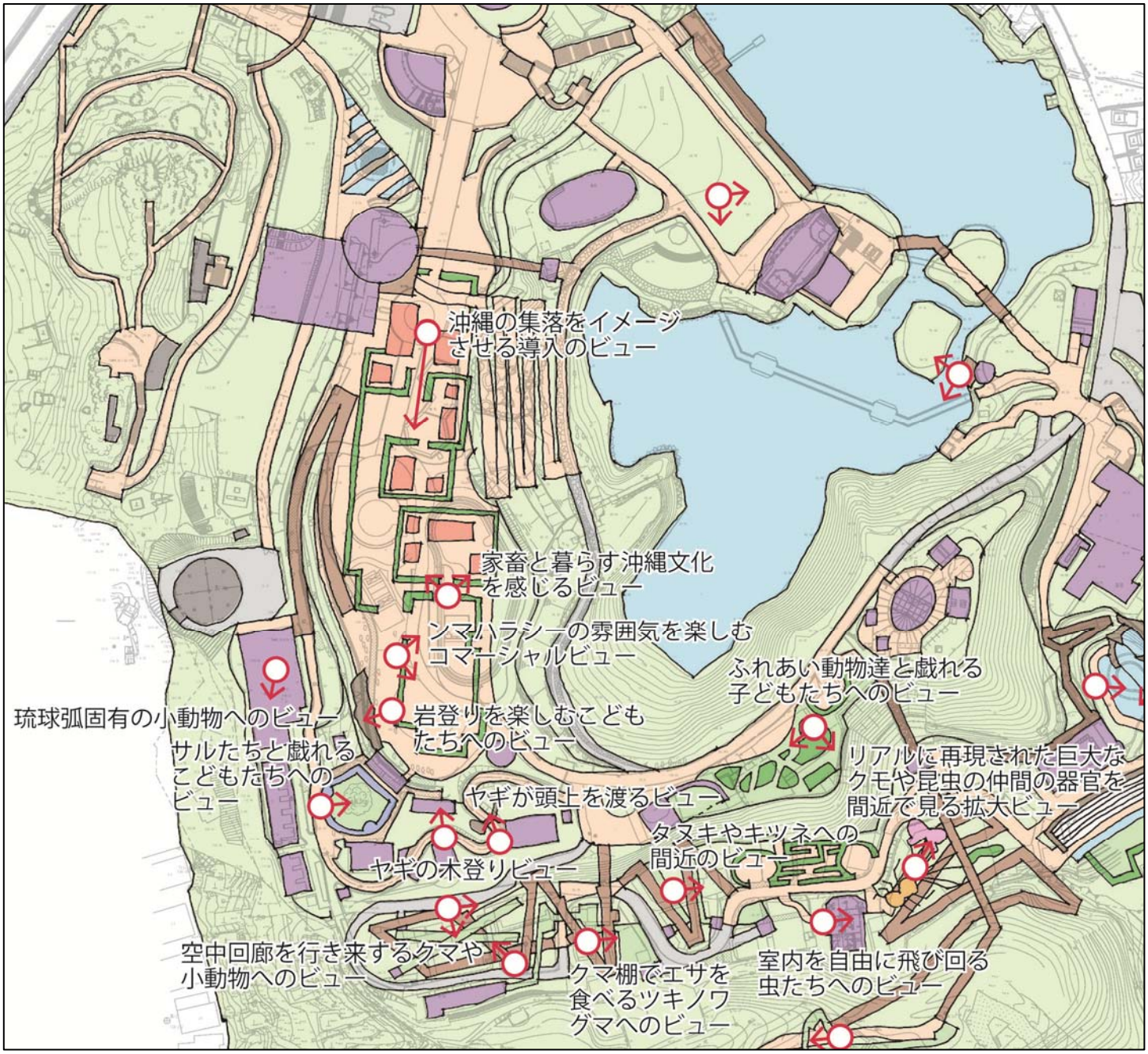
【里山の迷宮エリア-2】－断面図 C



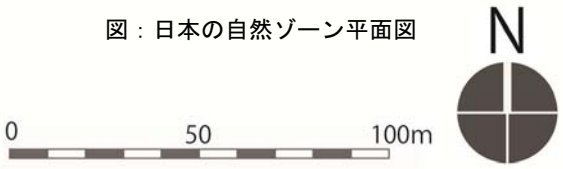
【里山の迷宮エリア-3】－断面図 D



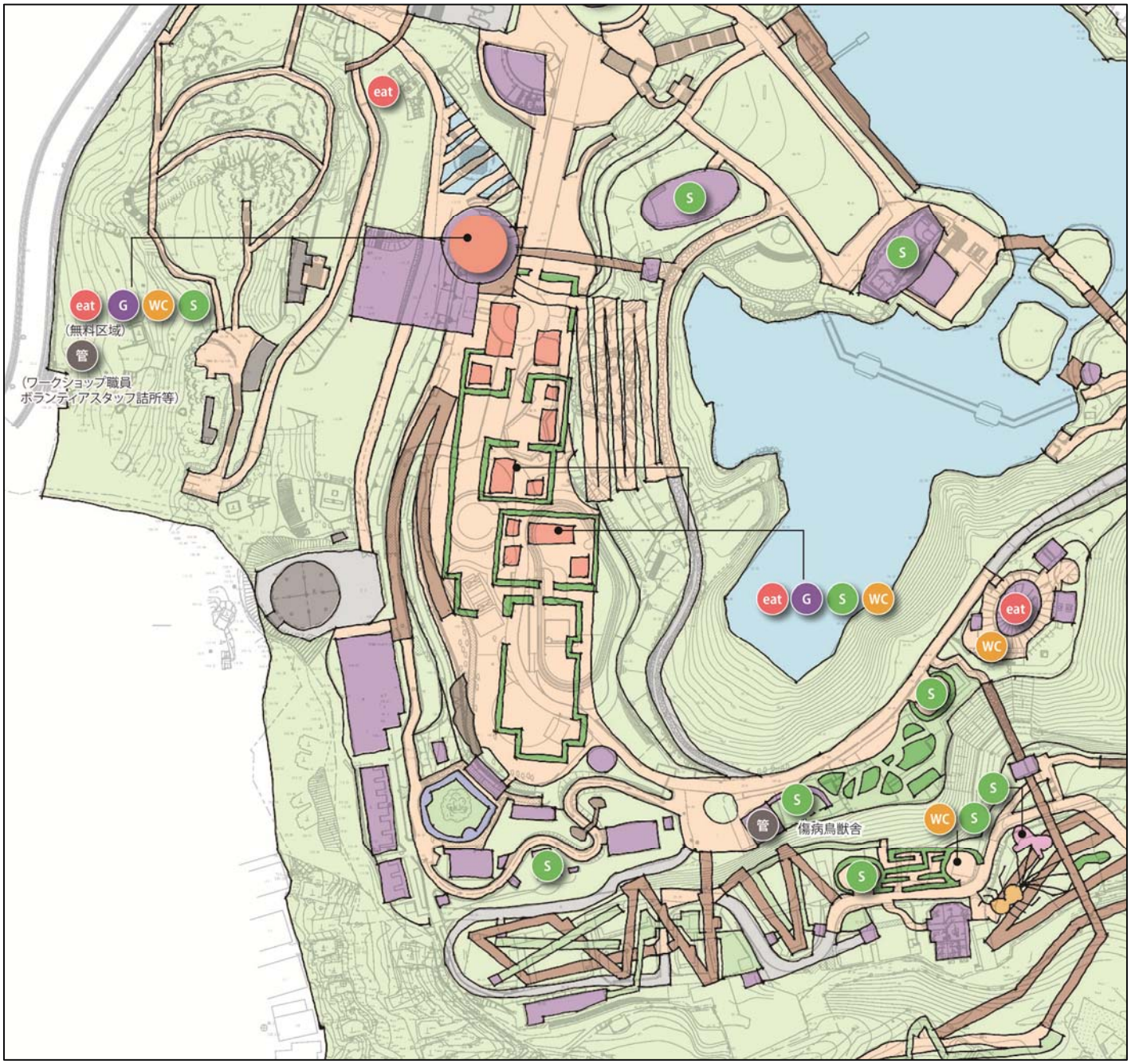
■ビューポイント



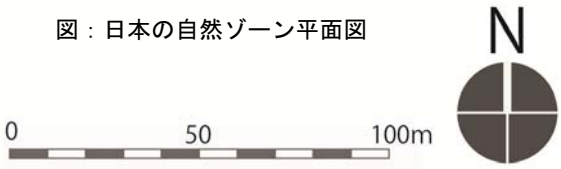
図：日本の自然ゾーン平面図



■便益サービス施設配置



図：日本の自然ゾーン平面図



③ジャングルゾーン

【概　要】

「多様性と進化のつながり」を感じてもらうゾーン。森に潜むたくさんの生命の輝きを象徴する彩り鮮やかな鳥たちの世界が広がる「バードケージ」、進化の過程で擬態という術を身につけた動物達を紹介する「カモフラージュの森」、人に近い祖先であるサルについて知る「サルの森」の三つのエリアとパビリオンで構成される。

【バードケージエリア】

・「森のにぎやかな住人達」をテーマに、リスザル、インコ、クジャク等が飛び交う大型ケージの中に入り込み、にぎやかな住人達と交流する。
・既存の樹木を活用したケージでは、樹林の林床、中間層、樹冠に暮らす多様な生き物が縦断的に見られ、多くのいのちが潜む森での共存共栄のしくみを感じる。
・鳥の巣遊具では、鳥の巣の感覚や鮮やかな色の理由、沢登り遊具では多様なフィールドサインと出会い、森の楽しみ方を知ることができる。

【カモフラージュの森エリア】

・多くのいのちがひしめくジャングルでは、いきていくためにカモフラージュという生活戦略を身につけた動物達がいる。例えば、トラの縞模様は生息地の環境に身をひそめ獲物に近付くように適応進化したものである。「カモフラージュの森」では、本物の動物が森にどのように潜むのかを見せるとともに、リアルな立体造形を林内に点在させ、潜んでいる動物たちを探すゲーム感覚の体験メニューを提供し、「いきるための生活戦略」を楽しみながらまなぶことができる。

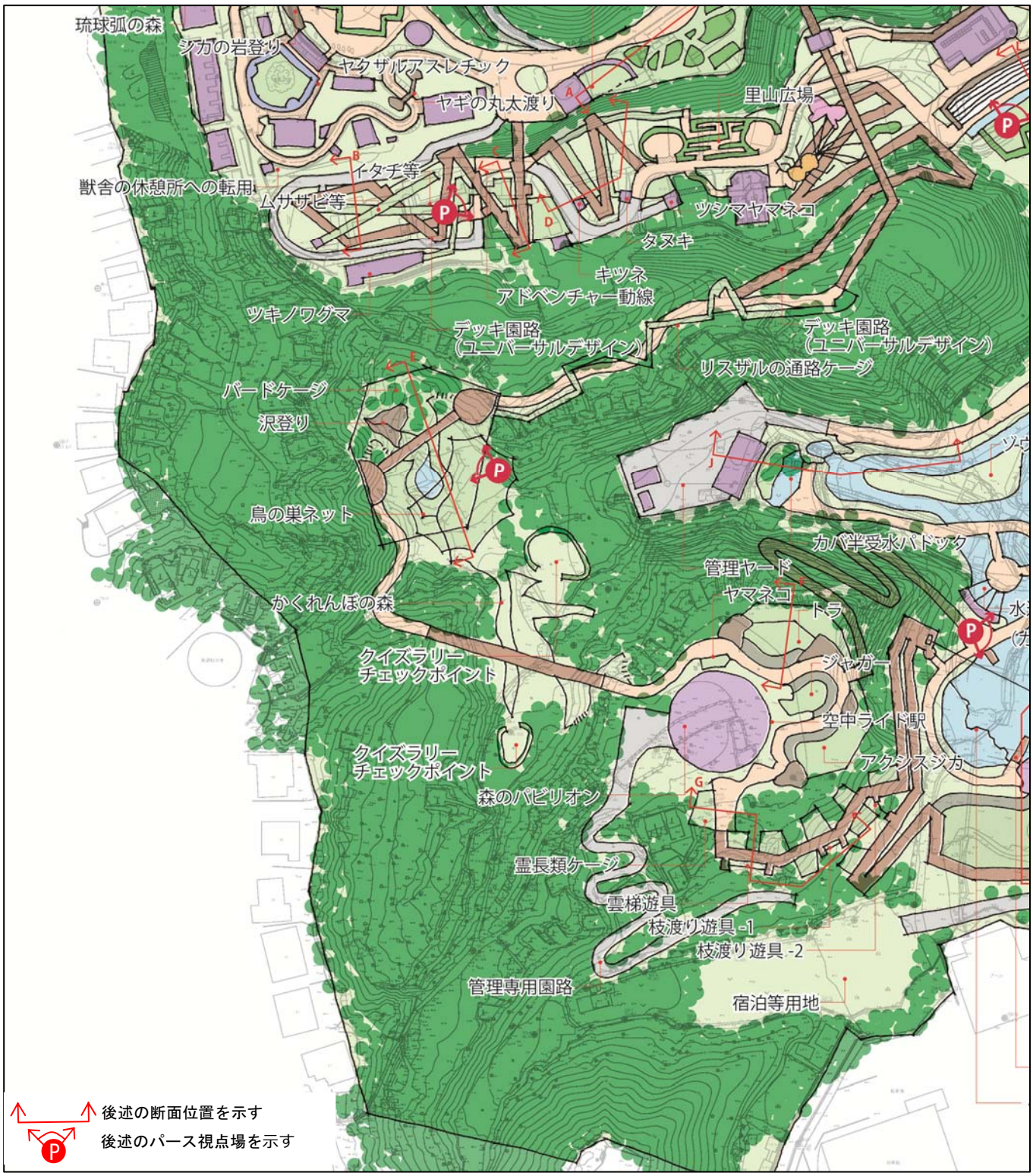
【サルの森エリア】

・私たちの祖先はサルとは別の進化を果たした。「森の賢者とくらべっこ」をテーマに、それぞれの優れた能力を知ることで、サルとヒトの違いを知り、進化について理解を深める。 また、サルの種類によって異なる群れのあり方を知ることで、生き方や自分と家族の存在等について考える機会を提供する。
・サルの種類ごとに違う枝渡りの方法を動物体験園路の遊具でサル目線で体感する中で、サルたちの驚くべき身体能力を感じる。

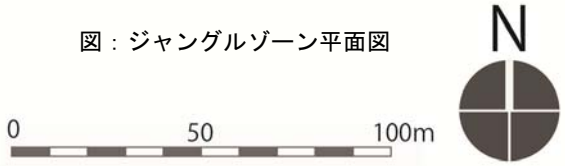
【森のパビリオン】

・森のパビリオンでは、「いきる力と進化」をテーマに、「いきるための形態の進化」としてバイオミミクリー※8を含めた環境への適応と人類への貢献、「サルとヒトはいつ別れたのか？」として非力だからこそ文明が必要であったこと等、能と心の発達等を伝える。
・展示ホール、獣舎、インフォメーション、サービスセンター、空中ライドの駅等で構成する。

※8 バイオミミクリーとは、生物の機能を模倣することで新しい技術を生み出す学問のこと。

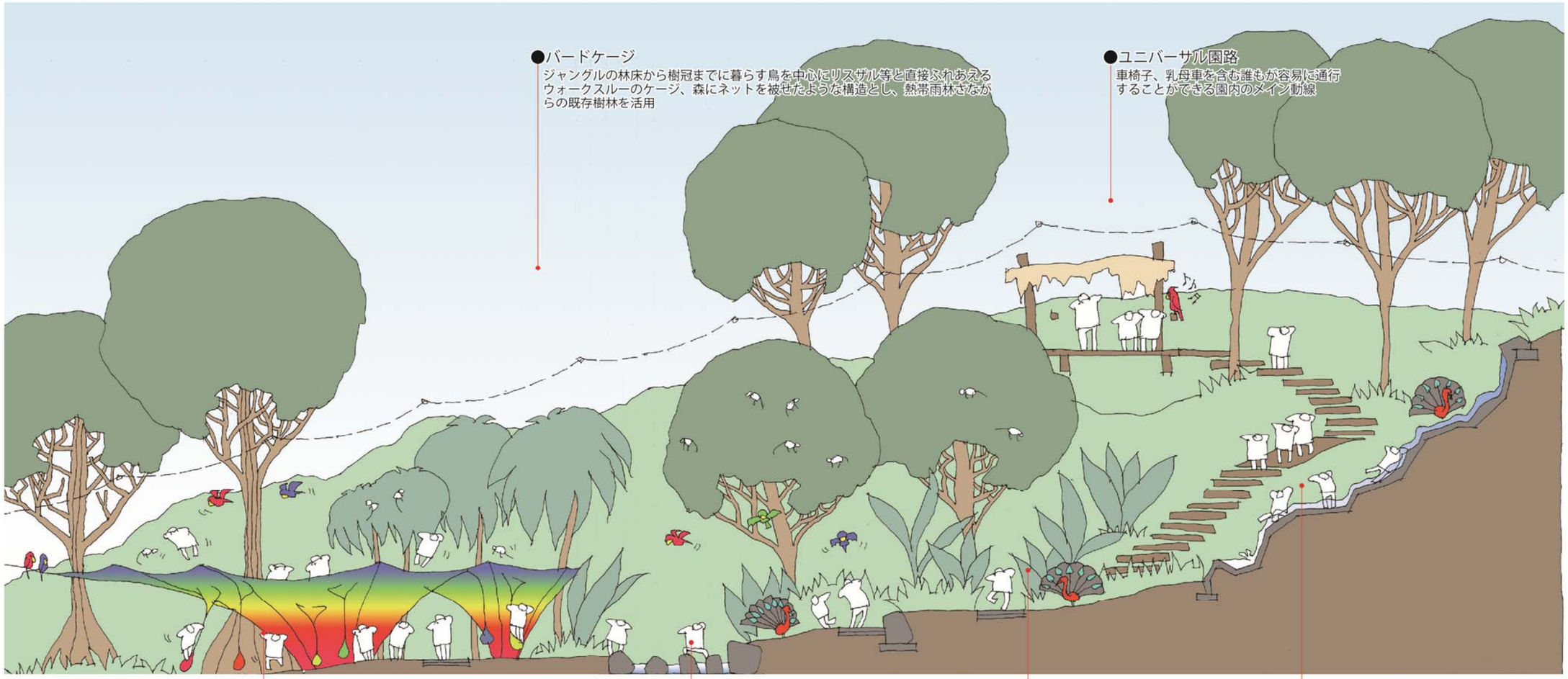


図：ジャングルゾーン平面図



バードケージエリアイメージパース

【バードケージエリア】－断面図Ｅ



●バードケージ
ジャングルの林床から樹冠までに暮らす鳥を中心にリスザル等と直接ふれあえるウォークスルーのケージ、森にネットを被せたような構造とし、熱帯雨林さながらの既存樹林を活用

●ユニバーサル園路
車椅子、乳母車を含む誰もが容易に通行することができる園内のメイン動線

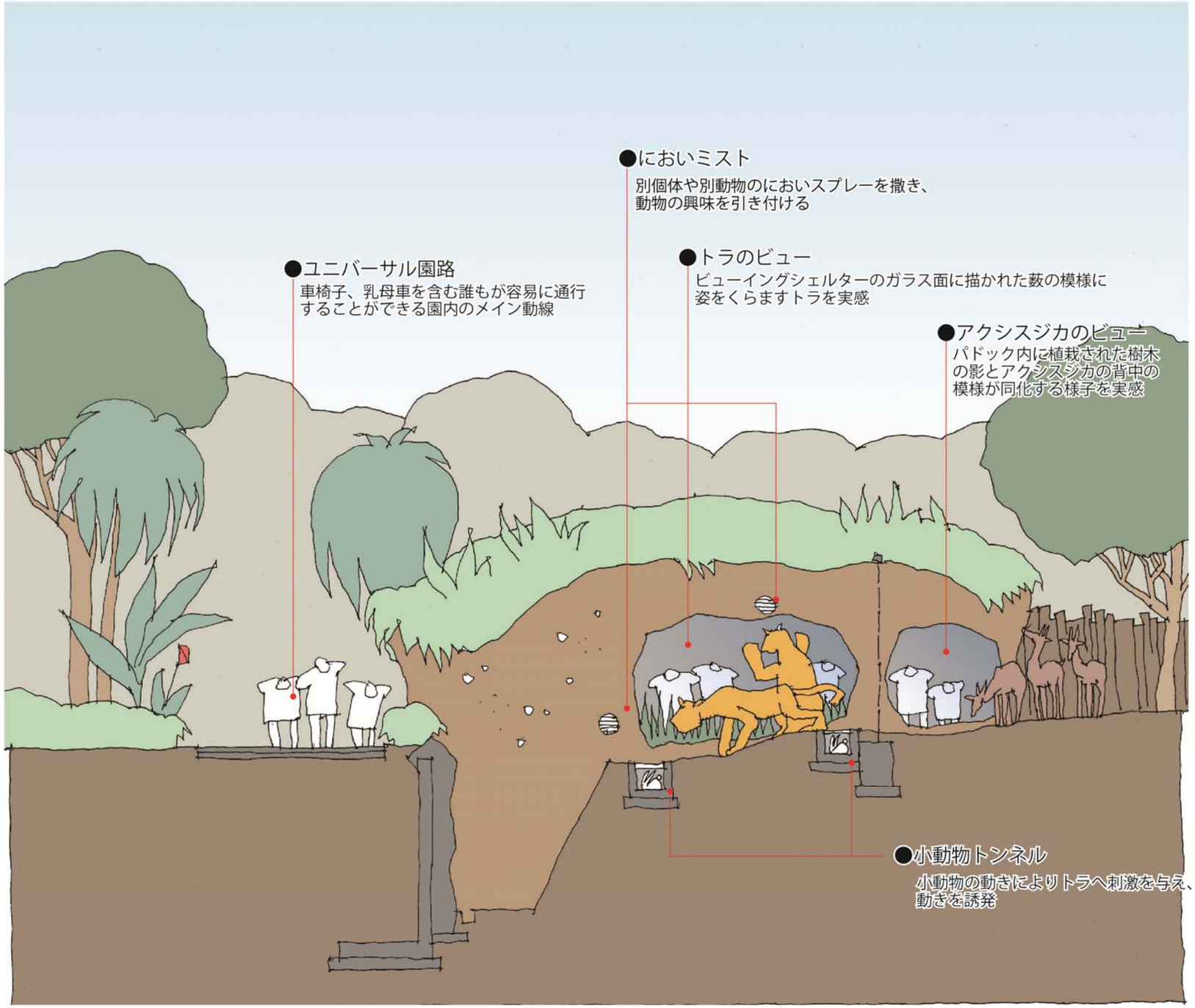
●巨大鳥の巣遊具
色とりどりの巨大な鳥の巣状のネット遊具、遊びながら林床～中間層～樹冠までを行き来することで、ジャングルの動物たちの上下方向での棲み分けを体感

●飛び石の池
オオオニバス等が植栽された池、飛び石を渡りながら熱帯の水生植物を間近で見る（アドベンチャー園路）

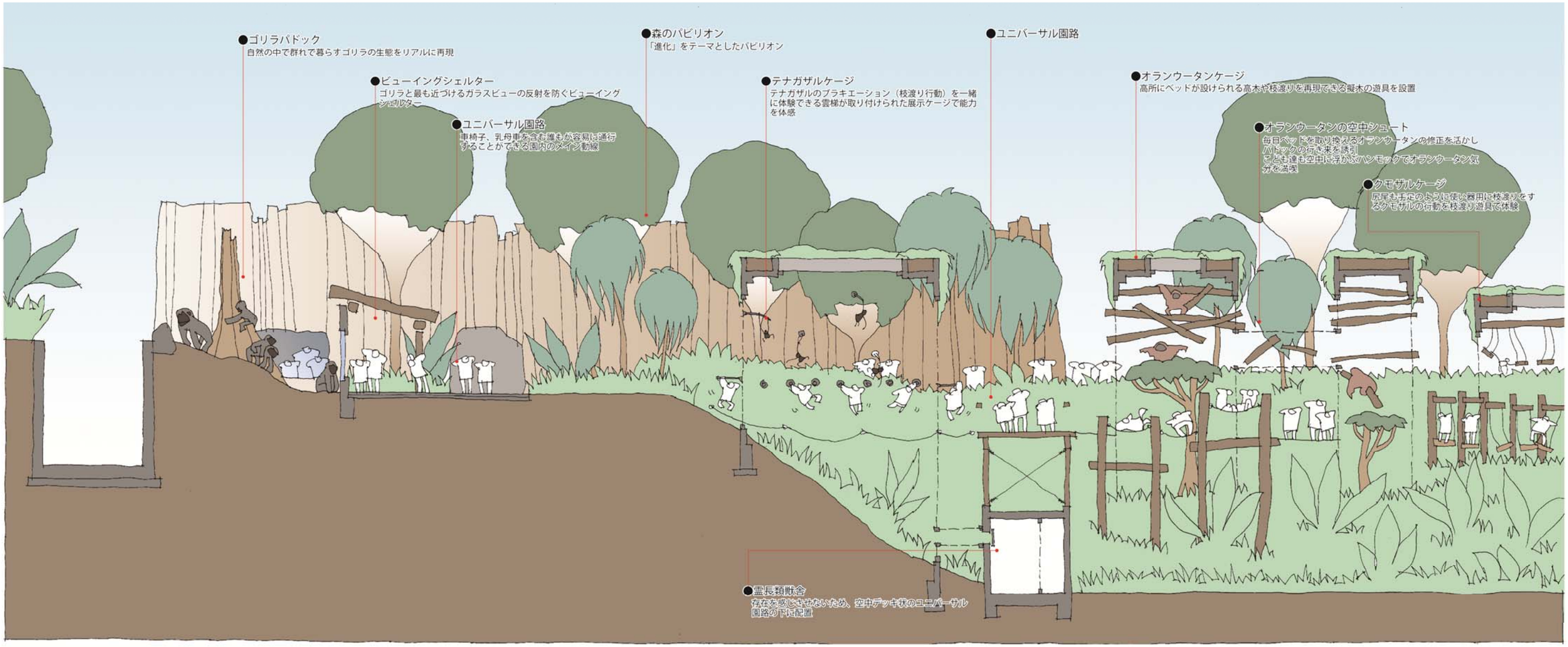
●ジャングルのやぶこぎ
熱帯の植物がブッシュ状に植栽された園路、ジャングルの多様な植物をかき分けて前進（アドベンチャー園路）

●沢登りスライダー
様々なフィールドサイン（レプリカ）が配置された沢沿いの道を登り動物たちが残す様々なサインを見つけるジャングル歩きを疑似体験、登りつくと沢のスライダーで一気に林床に急降下

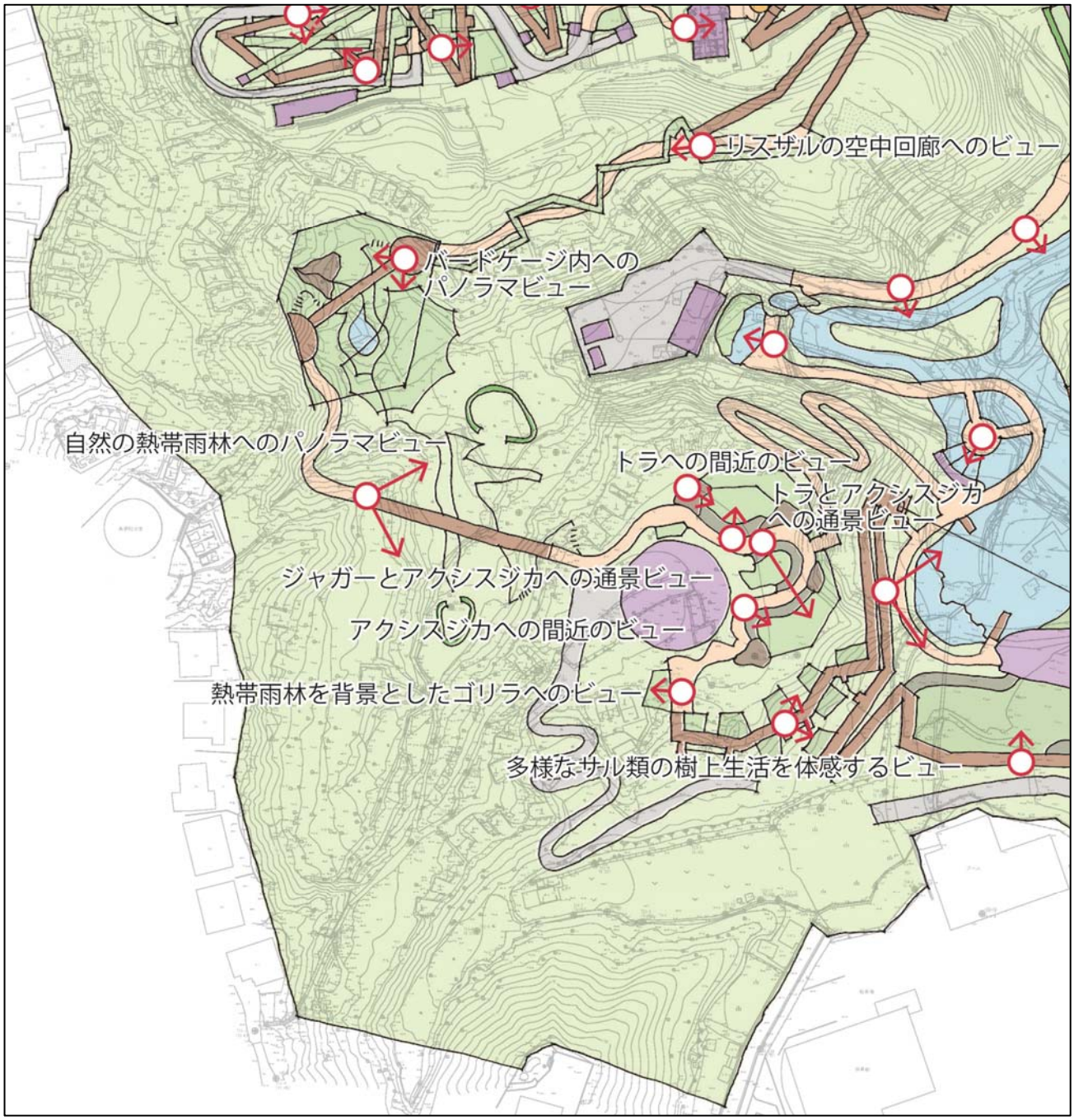
【カモフラージュの森エリア】－断面図Ｆ



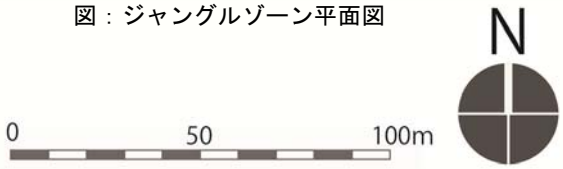
【サルの森エリア】－断面図 G



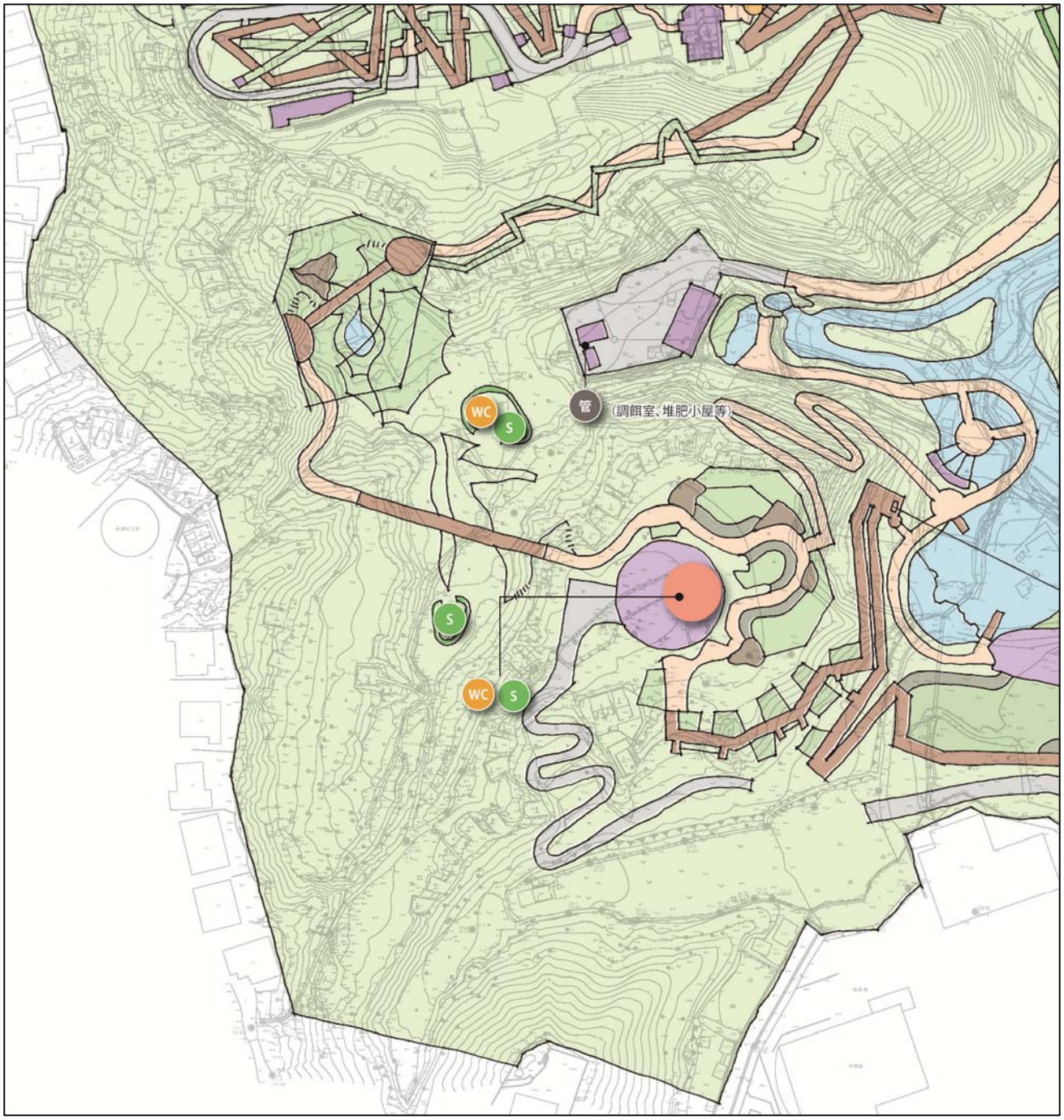
■ビューポイント



図：ジャングルゾーン平面図



■便益サービス施設配置



図：ジャングルゾーン平面図

④草原の動物ゾーン

【概　要】

「食べることを通した命のつながり」を感じてもらうゾーン。

弱肉強食の世界で群れによって生き抜く草食獣の展示を中心とした「草食獣の群れエリア」と肉食獣の展示を中心とした「肉食獣の多様性エリア」の二つのエリアとパビリオンで構成される。

【草食獣の群れエリア】

・「みんなでいき抜く」をテーマに、ジャングルとは打って変わって栄養価の低い草原の食べ物環境の中で、種を維持するために群れを構成していること、食べ物を食べ分けることを通じて、いきる上で食べることが欠かせないことを知る。

・「巣づくりフィールド」では、ミーアキャットやプレーリードッグ等の小動物の展示と合わせて、巣づくり上手な彼らを真似て、自分たちの巣づくり体験等ができるワークショップ広場を設ける。

【肉食獣の多様性エリア】

・「食べもので変わる姿」をテーマに、草食獣と肉食獣、食べるもので変わる体のつくりや、生き物はみな食べることでつながっていることを実感する。

・来園者が食べられる側の動物になりきり、ライオン等の肉食獣に恐る恐る近づき肉食獣の大きな顔、発達したアゴ等のすごい迫力を感じる体験や、トロッコライドからは、ガラス等を介さず、最も近くで肉食獣と出会う体験ができる。

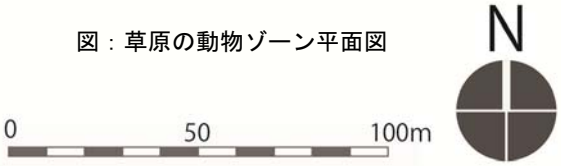
【草原のパビリオン】

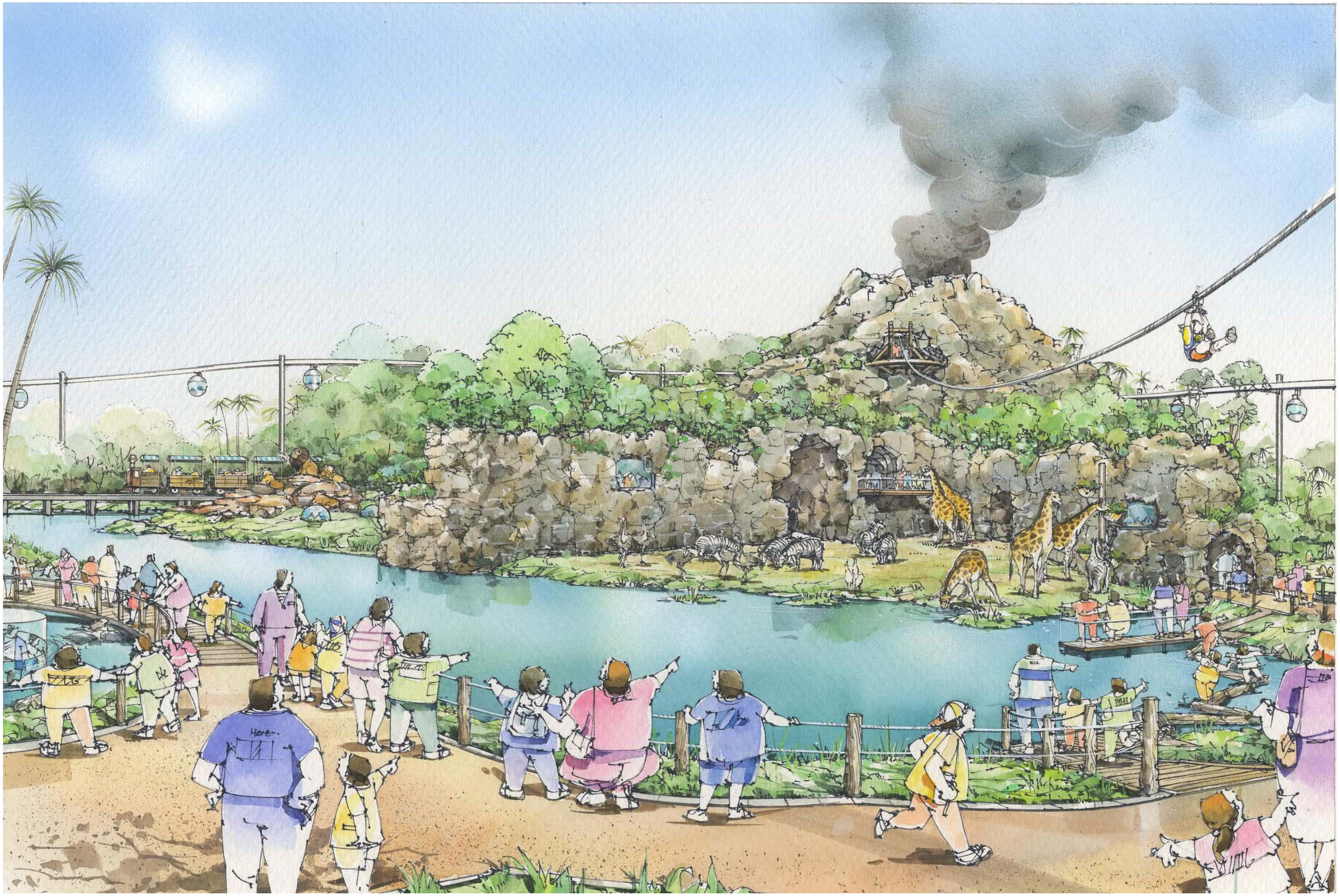
・草原のパビリオンでは、「食べる」にこだわり、多様な動物の食べ物とそこから得られるカロリーの比較や多様な動物達と身体能力を競い消費カロリーまでわかるバーチャル体験等ができるようにする。

・飲食・物販施設では、多様なスタイルの「食」の紹介やフェアトレード等、世界中の環境保護や動物愛護の取り組みを体験できるようにする。

・展示ホール、飲食・物販施設、獣舎、インフォメーション、サービスセンター、空中ライドの駅等で構成する。

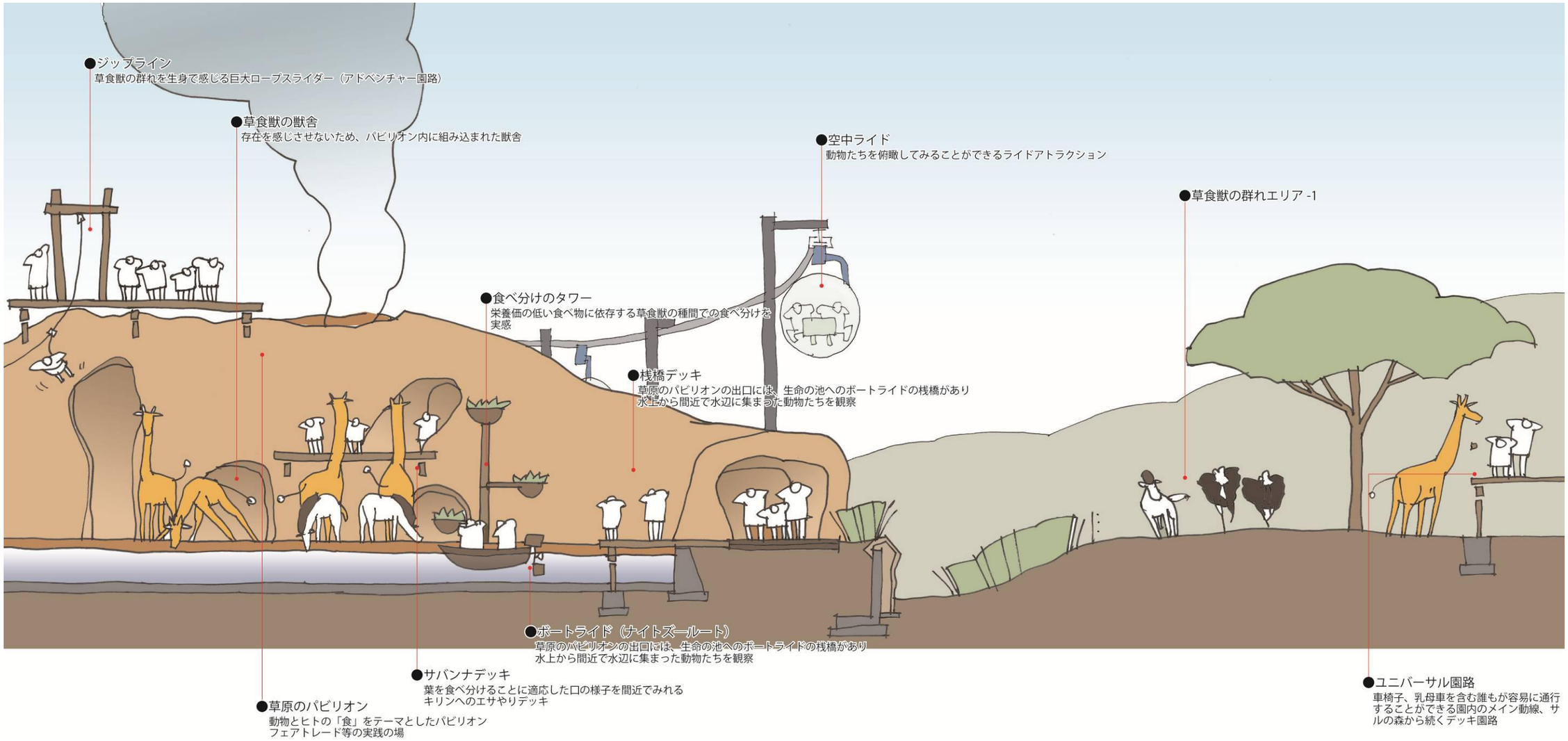
図：草原の動物ゾーン平面図



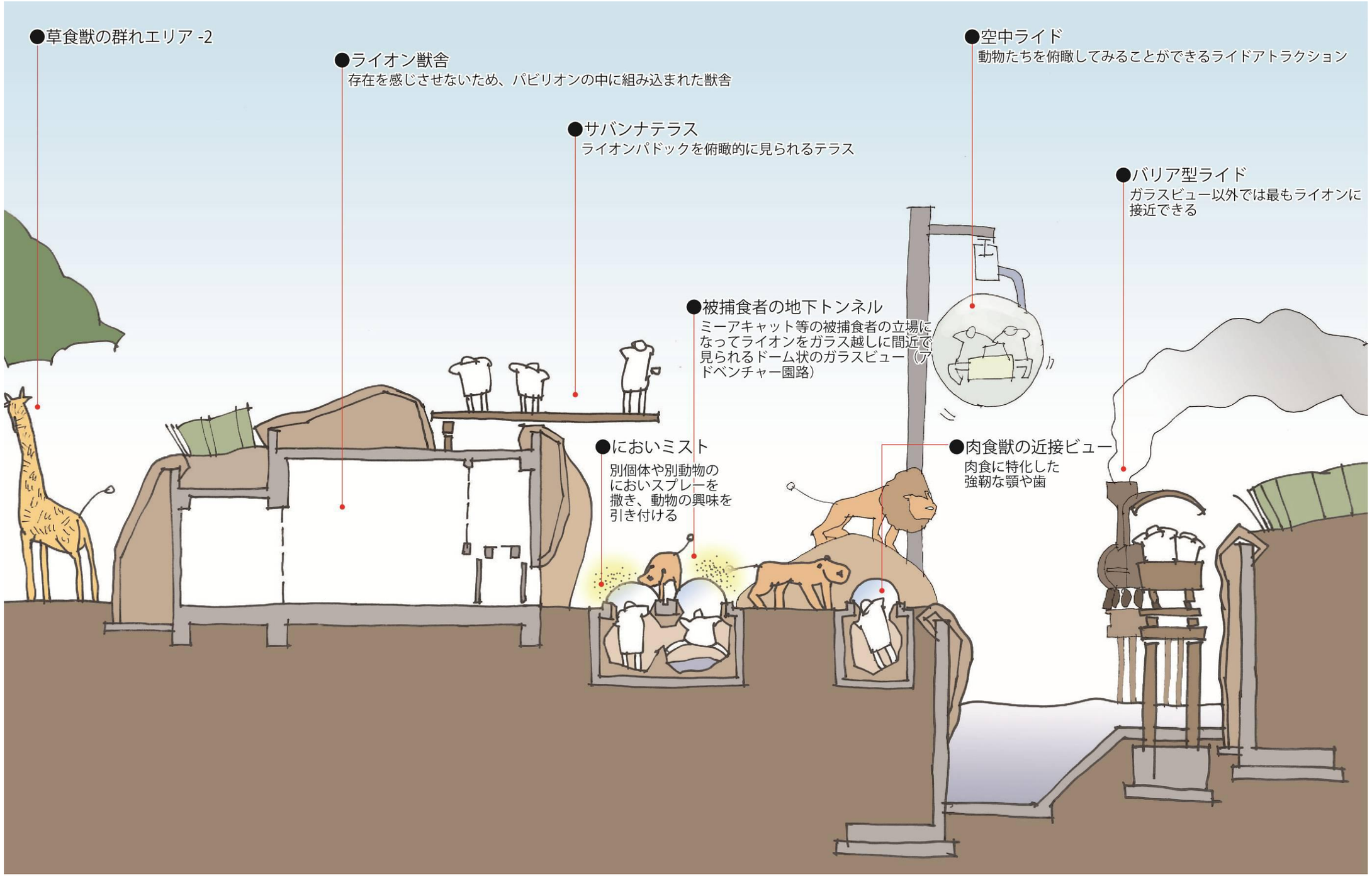


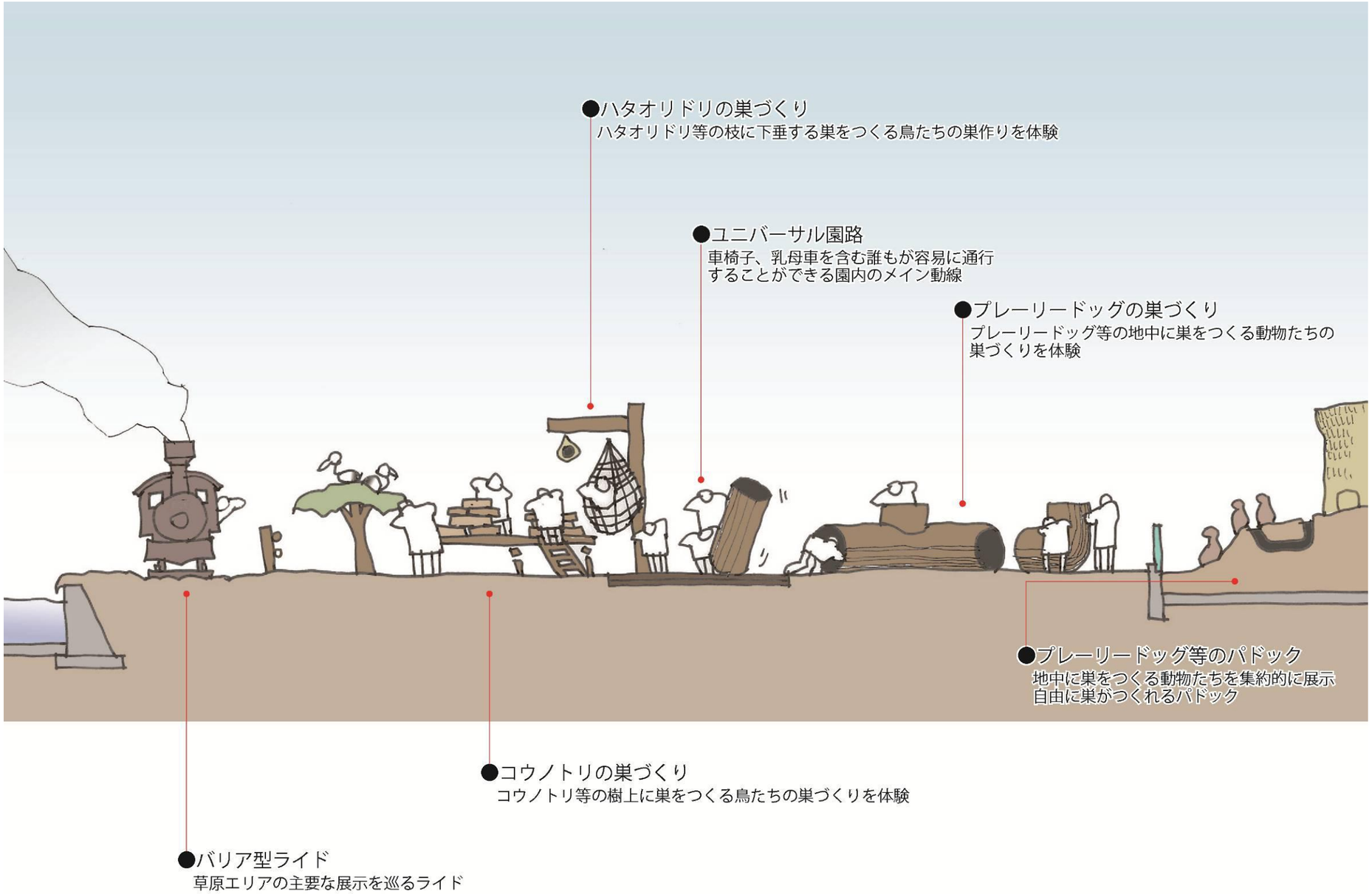
草食獣の群れエリアイメージパース

【草食獣の群れエリア】－断面図 H



【肉食獣の多様性エリア】 – 断面図 I




●ハタオリドリの巣づくり
ハタオリドリ等の枝に下垂する巣をつくる鳥たちの巣作りを体験
●ユニバーサル園路
車椅子、乳母車を含む誰もが容易に通行
することができる園内のメイン動線
●プレーリードッグの巣づくり
プレーリードッグ等の地中に巣をつくる動物たちの
巣づくりを体験
●プレーリードッグ等のパドック
地中に巣をつくる動物たちを集約的に展示
自由に巣がつくれるパドック
●コウノトリの巣づくり
コウノトリ等の樹上に巣をつくる鳥たちの巣づくりを体験
●バリア型ライド
草原エリアの主要な展示を巡るライド

■ビューポイント

巣づくりワークショップ等へのビュー

ミーアキャット等の巣穴を見せるビュー

特徴的な進化を果たした
カンガルーやオオアリクイへのビュー（ウォークインビューも検討）

カンガルーやオオアリクイと同じ目線のトロッコからのビュー

肉食獣と同じ目線のトロッコからのビュー

肉食獣のパドックを俯瞰するビュー

サバンナへの
パノラマビュー

肉食獣を間近に地中から見上げるビュー

草食獣のパドックを俯瞰するビュー

草食獣を様々な高さから間近で見るビュー

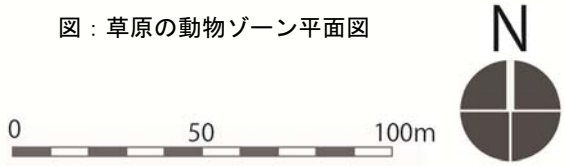
図：草原の動物ゾーン平面図

N

0　50　100m

■便益サービス施設配置

図：草原の動物ゾーン平面図

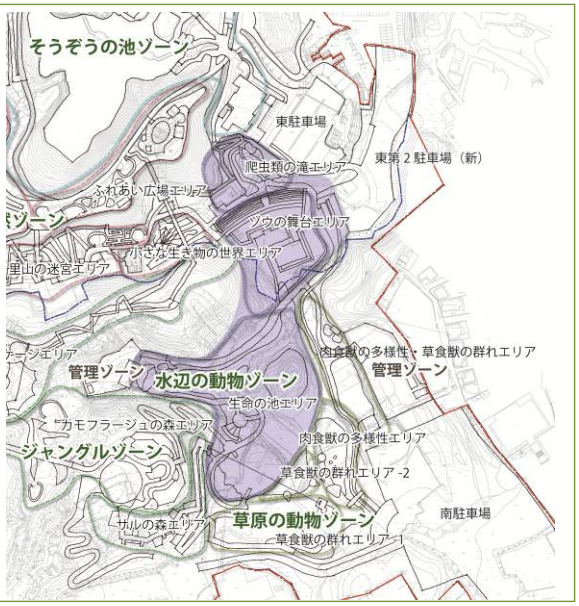


⑤水辺の動物ゾーン

【概　要】

「歩みをともにするつながり」を感じてもらうゾーン。

多くの生き物が水を求めて集い共存する「生命の池エリア」、歩みが途絶えた恐竜の祖先である爬虫類を対象にした「爬虫類の滝エリア」、人と野生動物の絆を表現する「ゾウの舞台エリア」の三つのエリアで構成される。



【生命の池エリア】

・「草食獣の群れエリア」や「肉食獣の脅威エリア」の動物たちも含め、水場に集まる動物たちの雄大な風景を通し「いのちが集う水辺」を感じてもらう。
・水中から水上での暮らしを得意とする小動物や鳥、特に水中では大きな体を楽々と動かすカバの生態を水中透視により知ることができる。

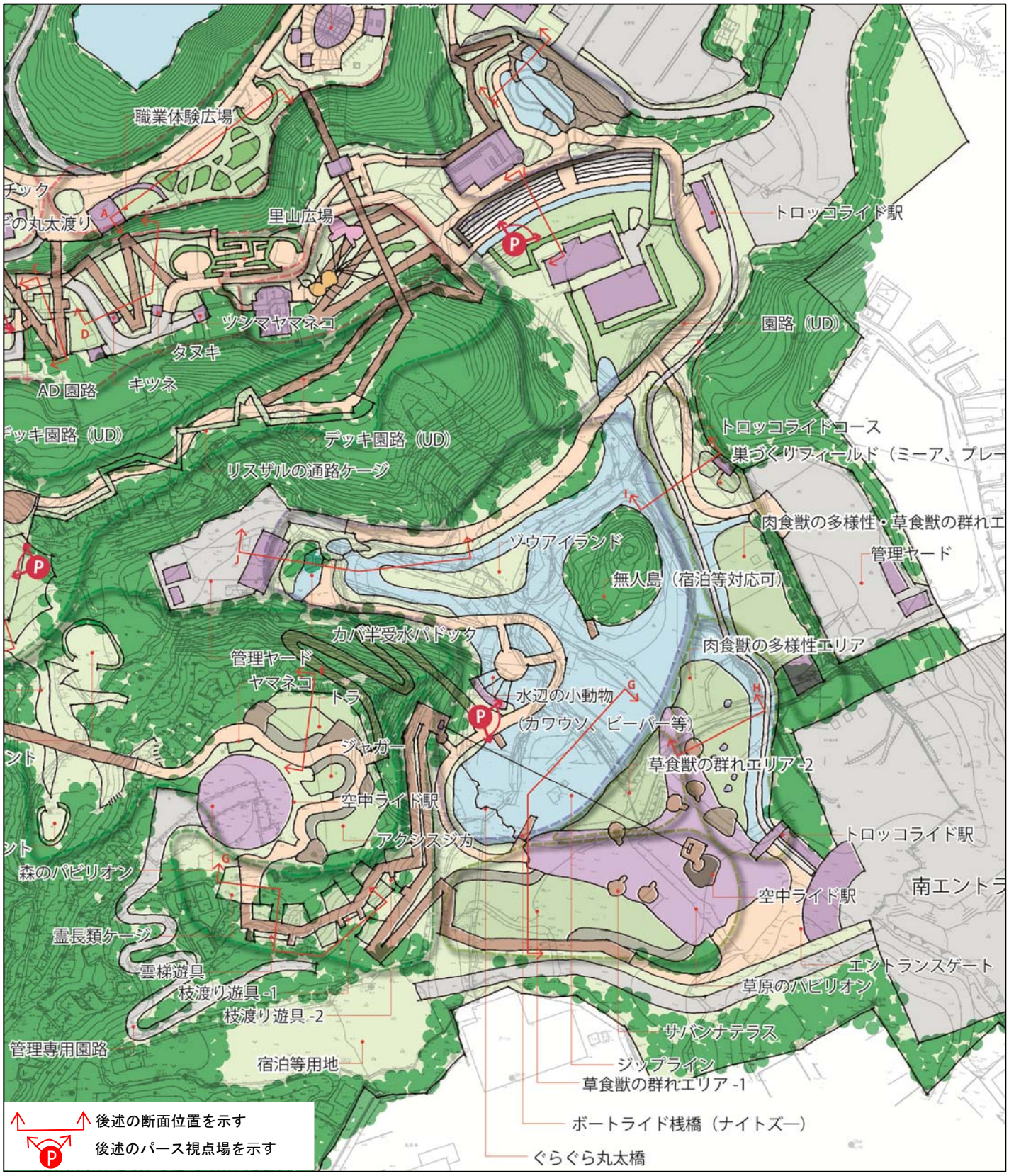
【爬虫類の滝エリア】

・「生きた化石とその仲間たち」をテーマとする。恐竜と同じ時代を生き抜いた「生きた化石」としてのワニを中心に、その仲間である爬虫類の多様な形態と特性を紹介する。
・同時代を生きていた恐竜の絶滅に思いを巡らせると共に、現在の種の絶滅の要因やスピードの違いについて考えるきっかけを提供する。
・既存爬虫類館は、ナーサリー※9 など飼育の裏側を展示空間として見せるセカンドケージとして活用する。

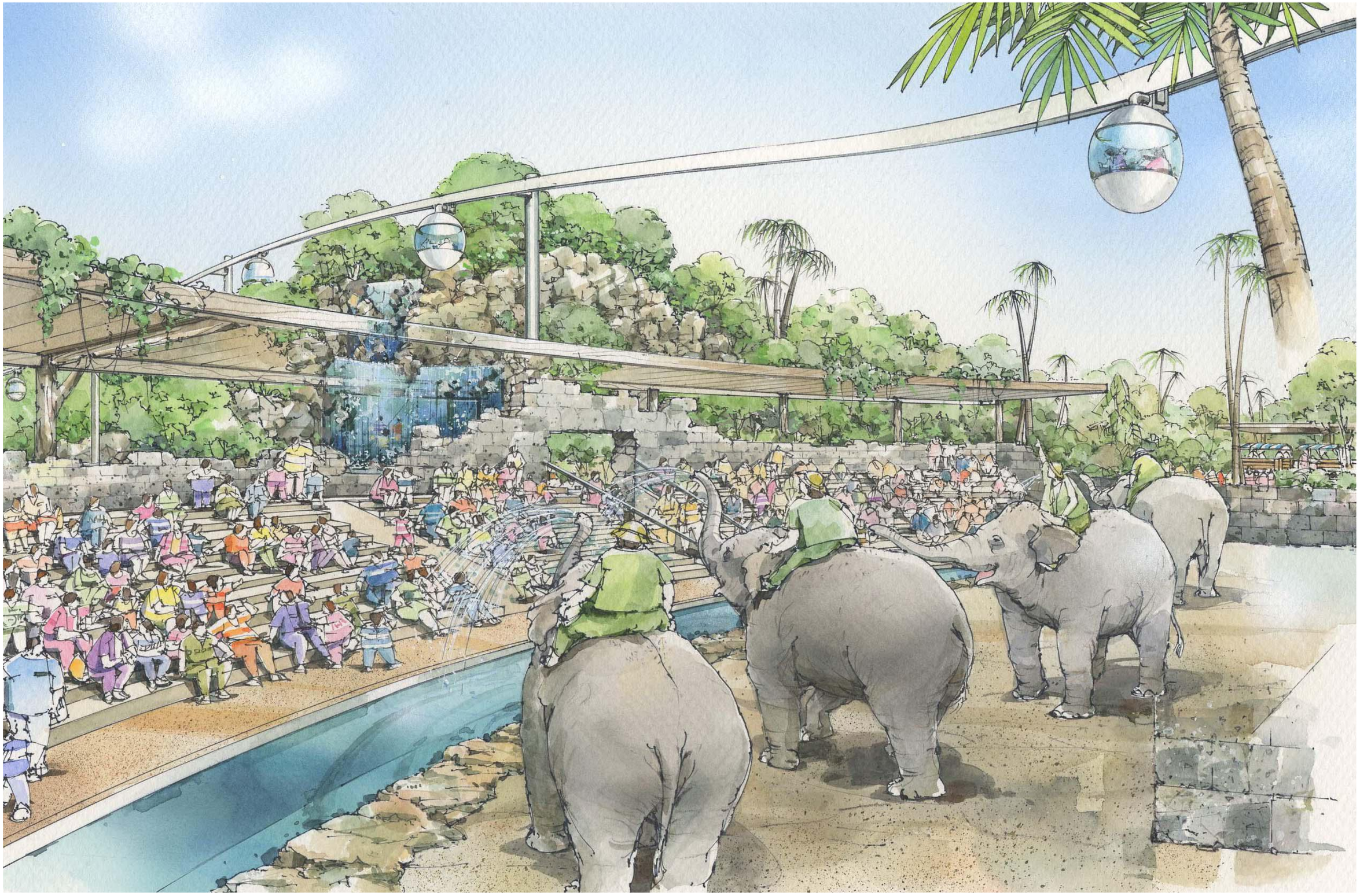
【ゾウの舞台エリア】

・「人と動物の絆」をテーマに、人と野生動物が共生する世界を象徴し、東南アジアのゾウの使役を体験プログラムとして導入し、トレーニングそのものを見せる。
・一方的にゾウのトレーニングを見せるのではなく、観客への水撒きや果物のおねだり等相互のコミュニケーションが発生するプログラム展開を図ることにより、共生関係をさらに際立たせる。
・使役動物として人と暮らすゾウは野生の動物であり、森の中で群れで暮らす野生本来の姿も見せる。

※9 ナーサリーとは、保育室のこと。ここでは、爬虫類の孵化から幼生期までの飼育場所等の意で使用。

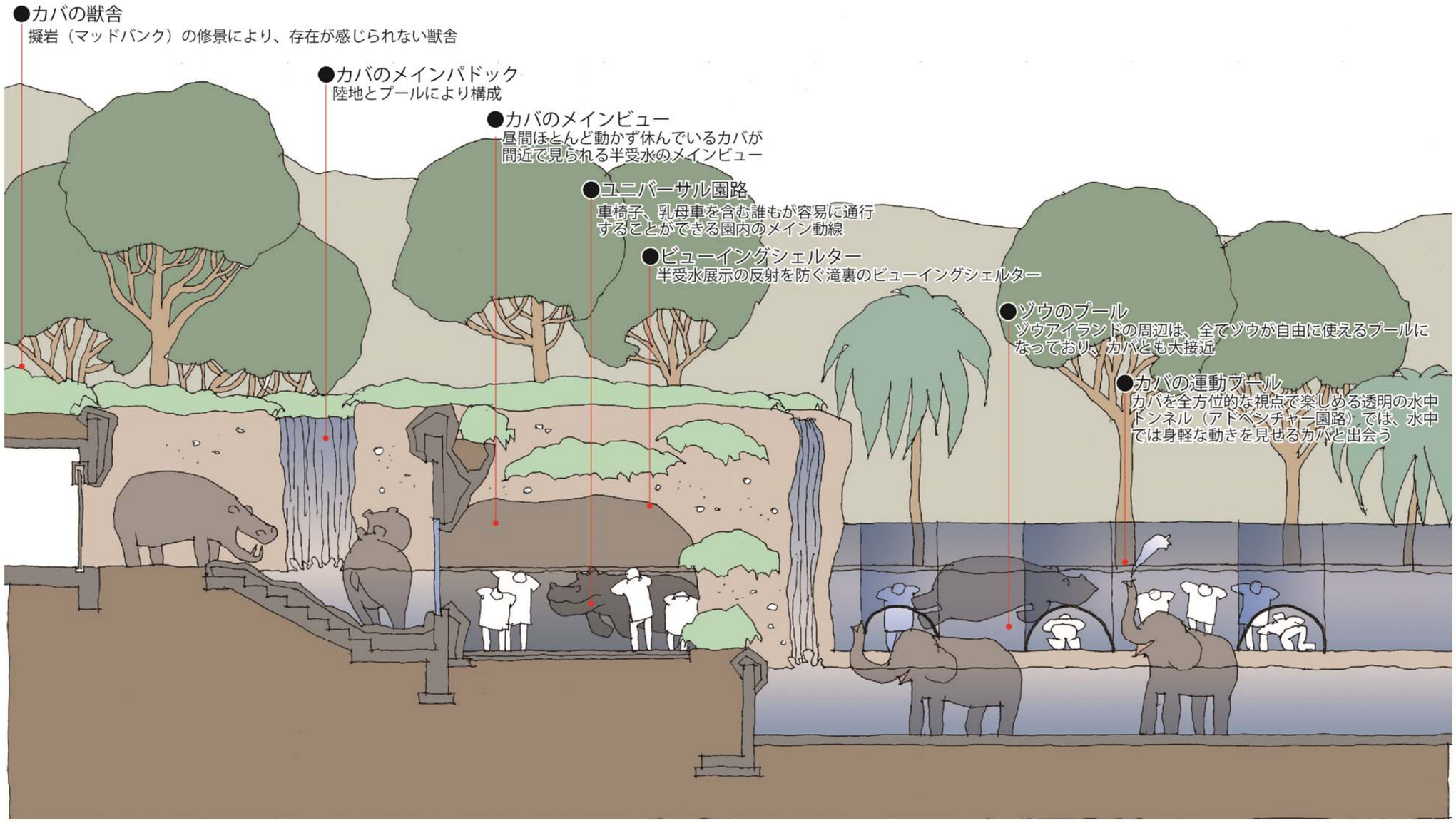


図：水辺の動物ゾーン平面図

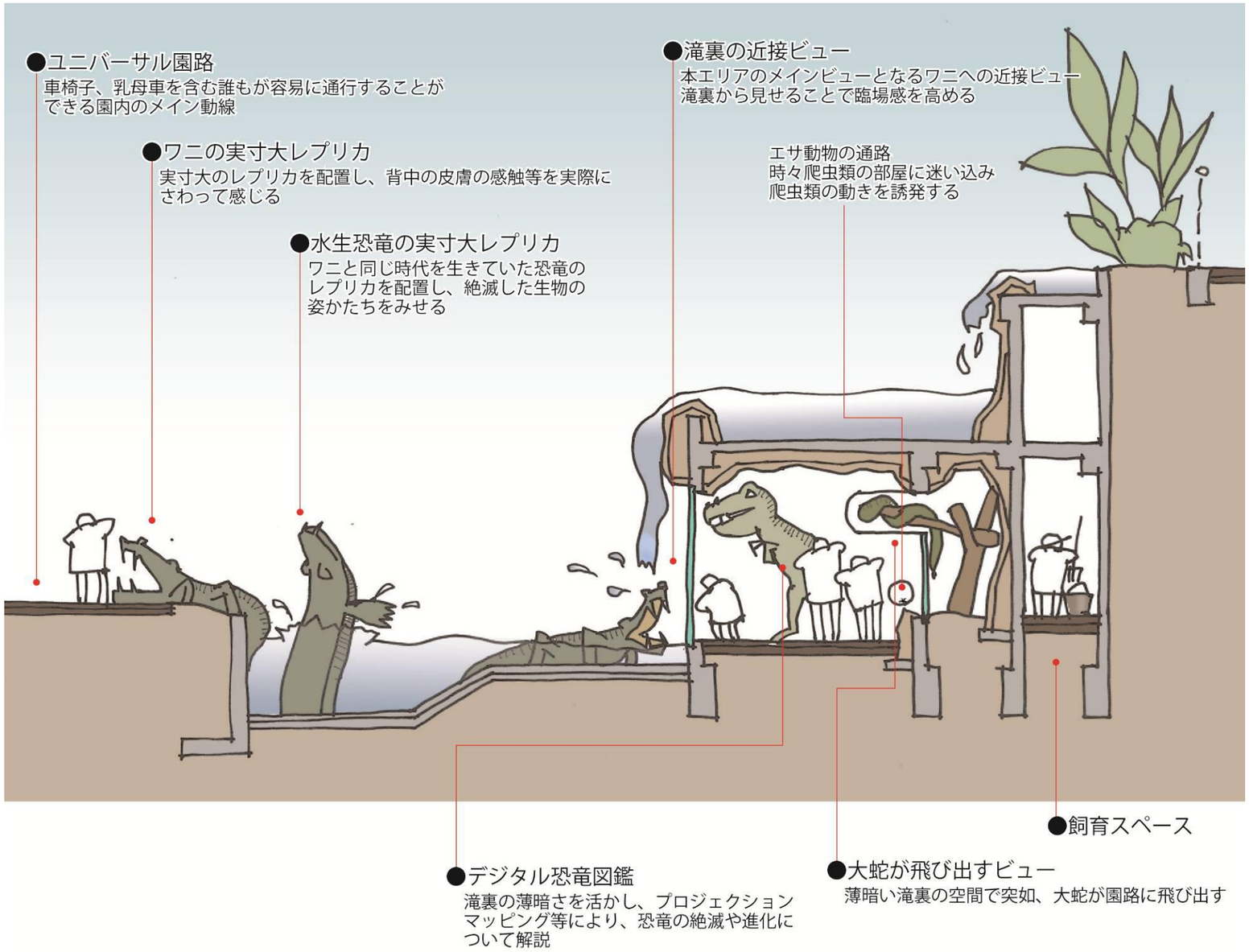


ゾウの舞台エリアイメージパース

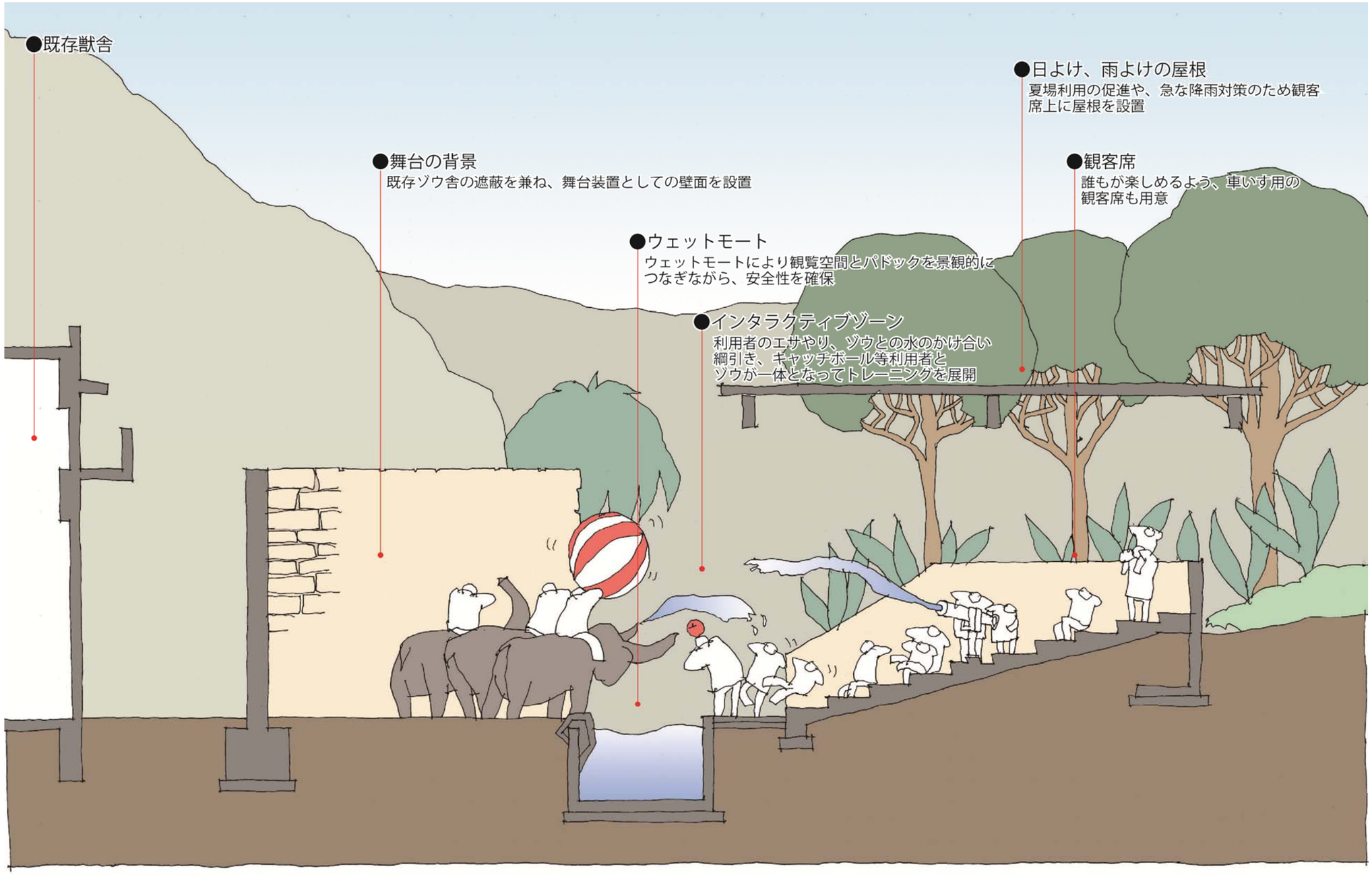
【生命の池エリア】－断面図Ｋ



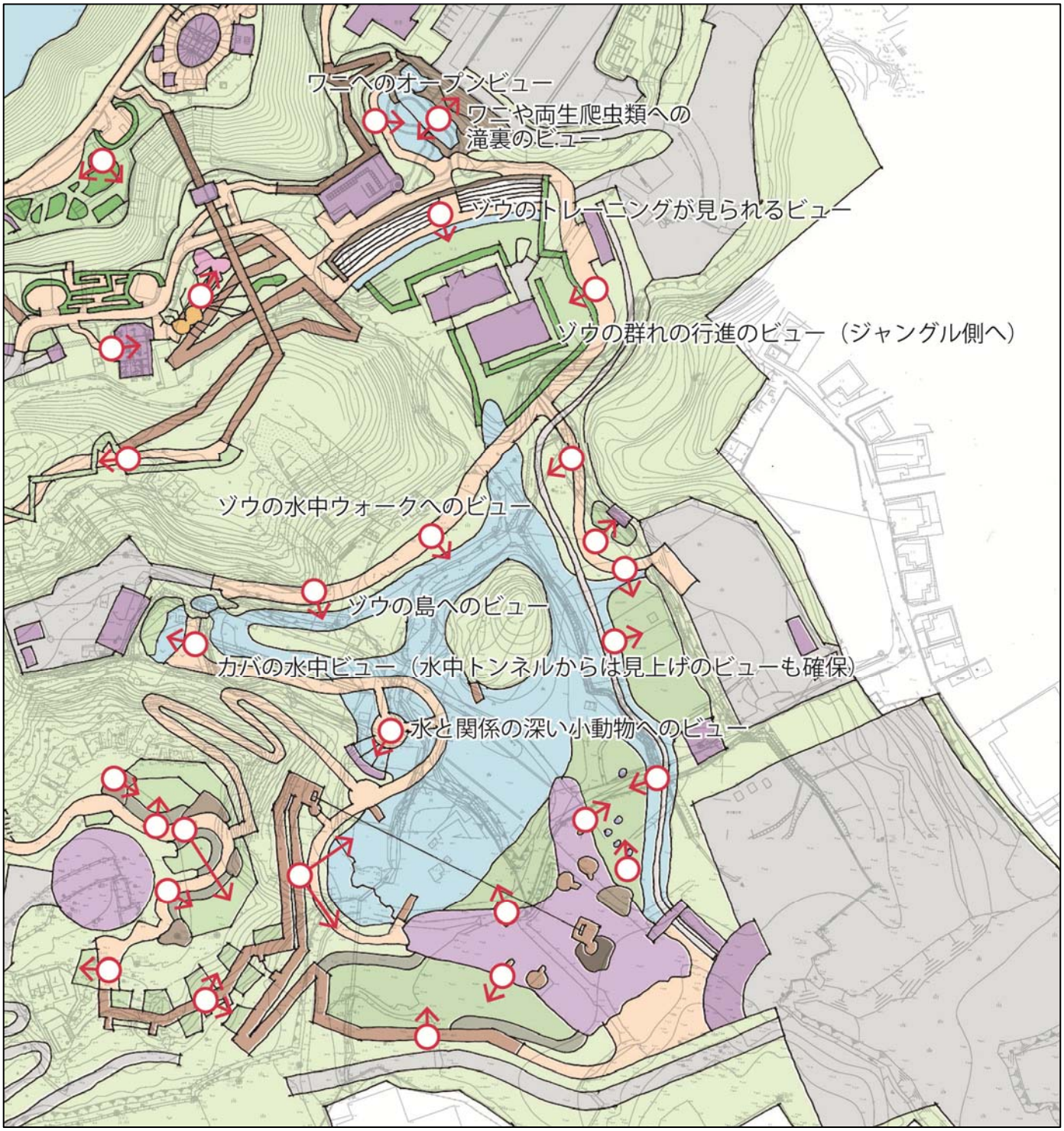
【爬虫類の滝エリア】－断面図Ｌ



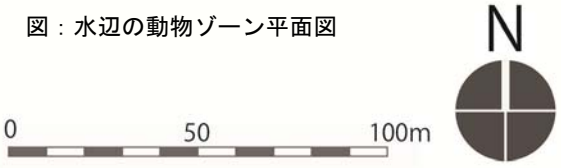
【ゾウの舞台エリア】－断面図 M



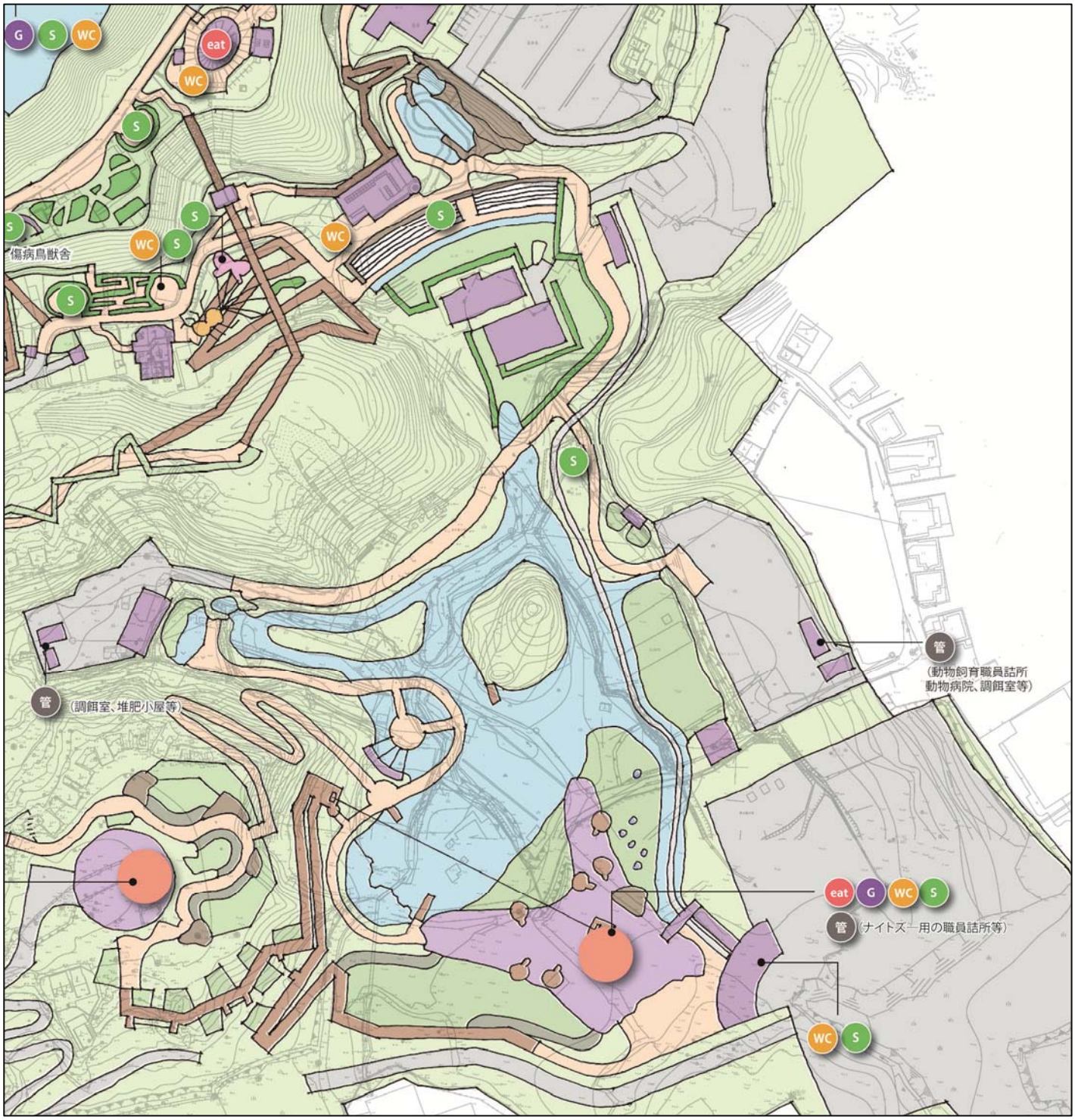
■ビューポイント



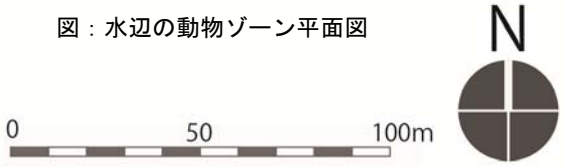
図：水辺の動物ゾーン平面図



■便益サービス施設配置



図：水辺の動物ゾーン平面図



⑥そうぞうの池ゾーン

【概　要】

「わたしたちの未来へつなぐ」をテーマに、既存池の水面を見ながら、園内で体験し感じた生命の輝き、生命の繁栄と共存の歴史、自然との共生に思いを巡らせる。既存施設のふるさと園やワンダーミュージアムは、沖縄ならではの自然共生の姿やこれからの環境共生の姿の想像、創造の場としていく。

【そうぞうの池】

・そうぞうの池では、水面に浮かぶ船に乗りながら、豊かな緑と水辺の環境に浸り、自生する生き物とのふれあいを通して、園内で体験し感じた世界の様々な環境での生命の輝き、生命の繁栄と共存の歴史、自然との共生に思いを巡らせることもできる、リラックスした憩いのひと時を提供する。

【ZOO スクール】

・既存の ZOO スクールを改修し、展示と飲食機能を持つ施設とする。
・飲食機能については、動物展示ゾーンの終点に位置することから、展示動物の生息地をテーマとするファストフードを集積したフードコートとする。
・展示機能については、世界各地の文化の多様性を世界の食文化とともに紹介する。

【ふるさと園】

・ふるさと園や周辺のビオトープ施設を活用し、沖縄の環境共生の体験の場としてさらに充実させていく。
・琉球弧エリアと連携を図り、現在ふるさと園で展開されているワークショップ等をさらに充実させていく。その際には、牛やアグー、ヒージャー等の家畜動物を散歩させながら連れてくるなど、園琉球弧エリアとふるさと園の間の空間も、来園者が思いがけず動物と遭遇するような楽しみの空間とする。

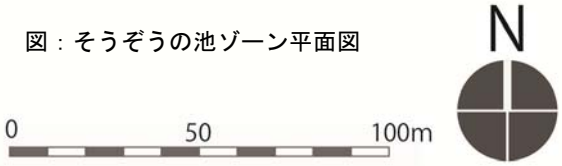
【ワンダーミュージアム】

・ワンダーミュージアムを活用し、これからの環境共生にも視野を広げる様々なワークショップや体験を付加し充実させていく。

【イベント広場】

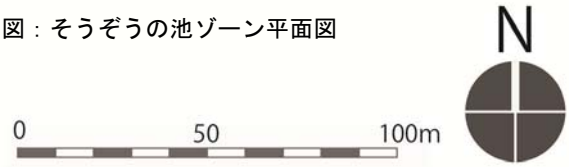
・様々な大規模イベントに加え、現在沖縄こどもの国で実施しているンマハラシーの大会やその練習の場としても、今後活用を図る。

図：そうぞうの池ゾーン平面図

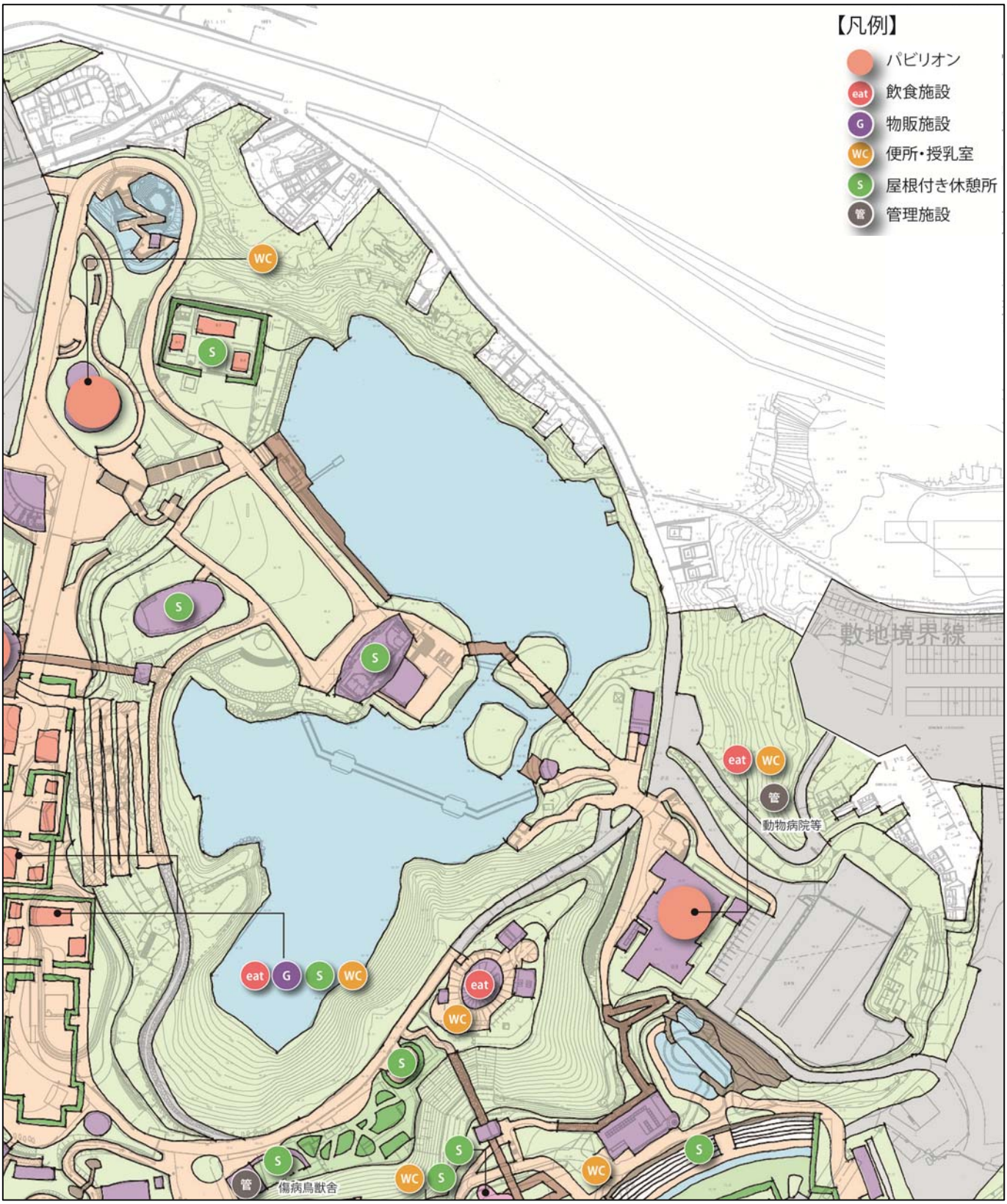


■ビューポイント

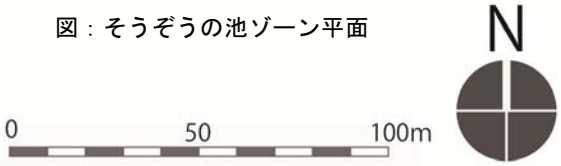
図：そうぞうの池ゾーン平面図



■便益サービス施設配置



図：そうぞうの池ゾーン平面



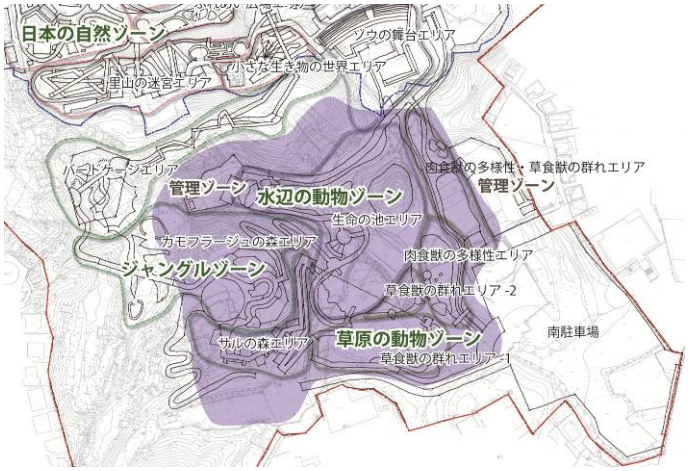
⑦ナイトズー

【概　要】

「夜の自然界」をテーマに、草原の動物ゾーン、水辺の動物ゾーン、ジャングルゾーンを対象に、昼間とは違う体験ができる常設ナイトズ―を展開する。

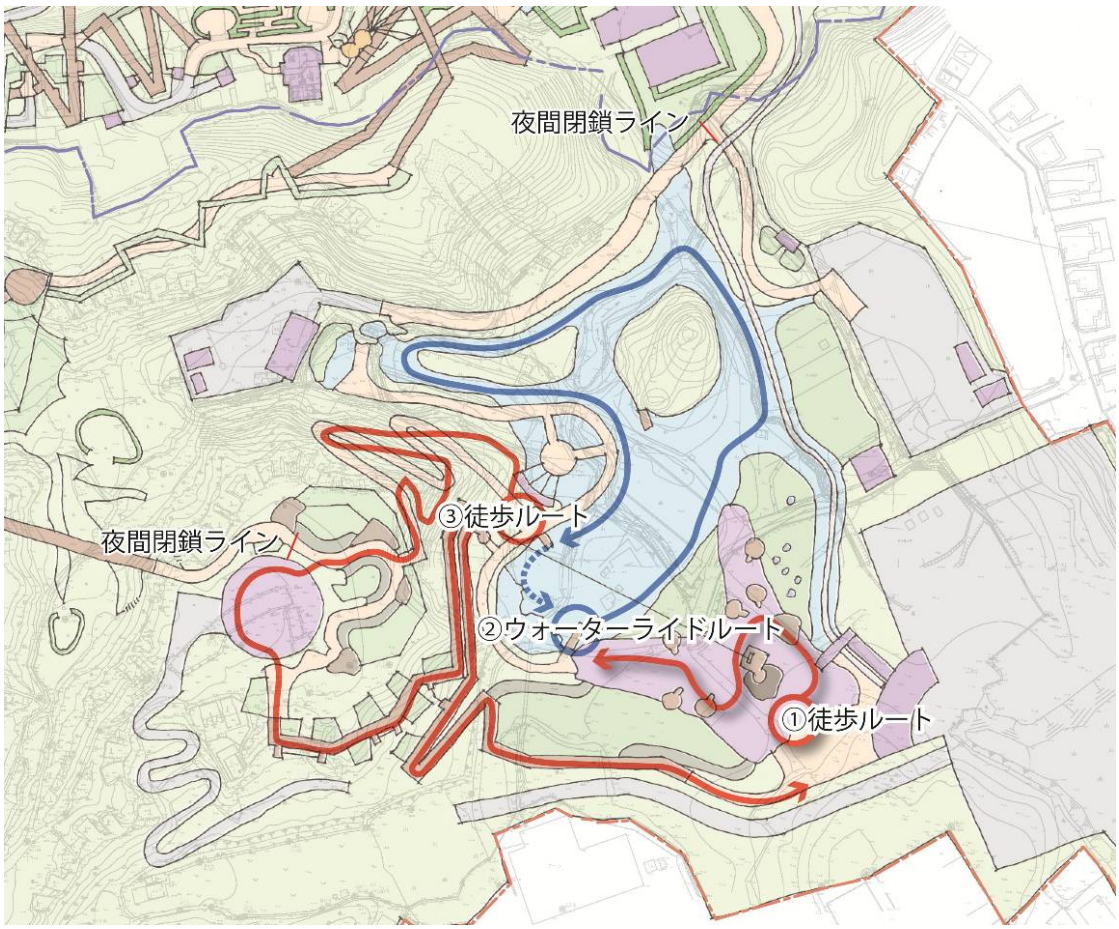
ナイトズ―では、通常人工的に昼夜反転させて展示している夜行性動物達を本施設では、本来の姿で見せることができる。

また、南エントランス付近（草原のパビリオン）には、ショーレストランを設け、ナイトズ―と連携した利用を図る。



【動線計画　(観覧ルート例)】

・昼間とは違う魅力を提供しつつ、夜間の安全性やセキュリティー確保のため、解説者が引率するライド方式やグループ観覧等の手法の導入、ICT(情報通信技術)の積極的活用を考慮する。



図：ナイトズー観覧ルート例

【体験ストーリー】

①南エントランスを抜け草原のパビリオンに入ると、夜間開園時にしか見ることのできないエスニックなショーが演じられている。飲食利用をしない来園者も遠景で見ることができる。

⇓

②パビリオンを抜けると生命の池が広がる。ウォーターライドに乗り込むと（徒歩も可能）立ったまま眠る草食獣や隙を狙い身を伏せる肉食獣などが見られる。

⇓

③クライマックスは、エサを物色しながら陸上をゆっくりと歩くカバの行進が見られる。

⇓

④ウォーターライドを降りると、森の中へと誘われ、ジャングルの静寂を感じながら森のパビリオンへと進む。途中、ジャングルの生き物と出会う。

⇓

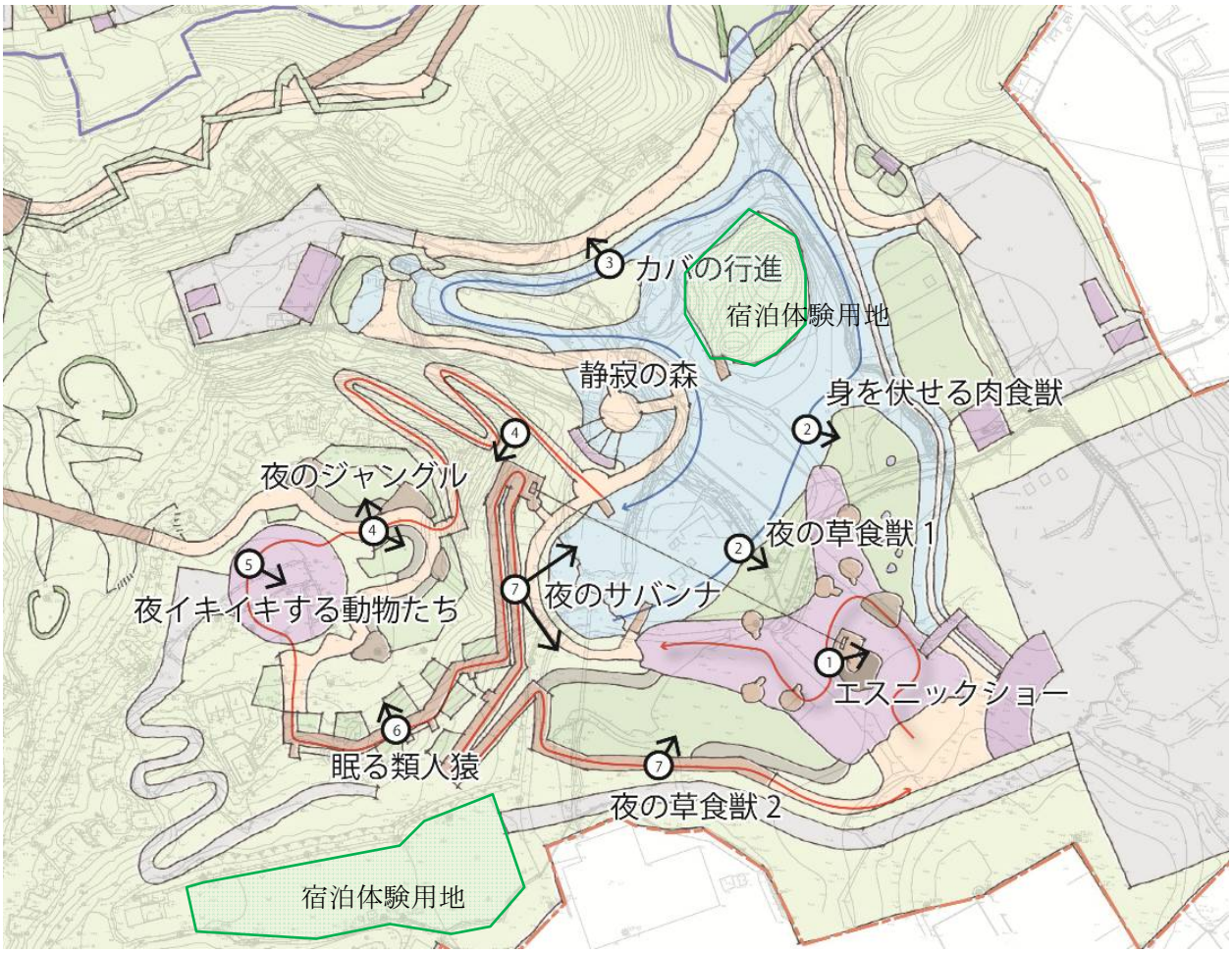
⑤森のパビリオンでは、夜行性の生き物たち（スローロリスやコウモリ、光るキノコ等）がイキイキと飛び回る（夜間開園時のみの展示）。

⇓

⑥パビリオンを出ると類人猿たちが樹上のベッドで眠り、その姿を息をひそめて見る。

⇓

⑦　南エントランスへと向かい、最後に眠るサバンナを見てナイトズーが終了する。



図：ナイトズーの主なビュー

【展示動物種】

・ナイトズ―において観察対象となる動物種を以下に整理する。

<草原の動物ゾーン：草食獣の群れエリア>

アミメキリン、シマウマ、サイ、ガゼル、インパラ、ヌ―、ダチョウ

<草原の動物ゾーン：肉食獣の群れエリア>

ライオン、ホワイトライオン、ハイエナ、チーター、ジャッカル

<森のパビリオン>

ロリス類（レッサースローロリス等）、メガネザル類等

<サルの森>

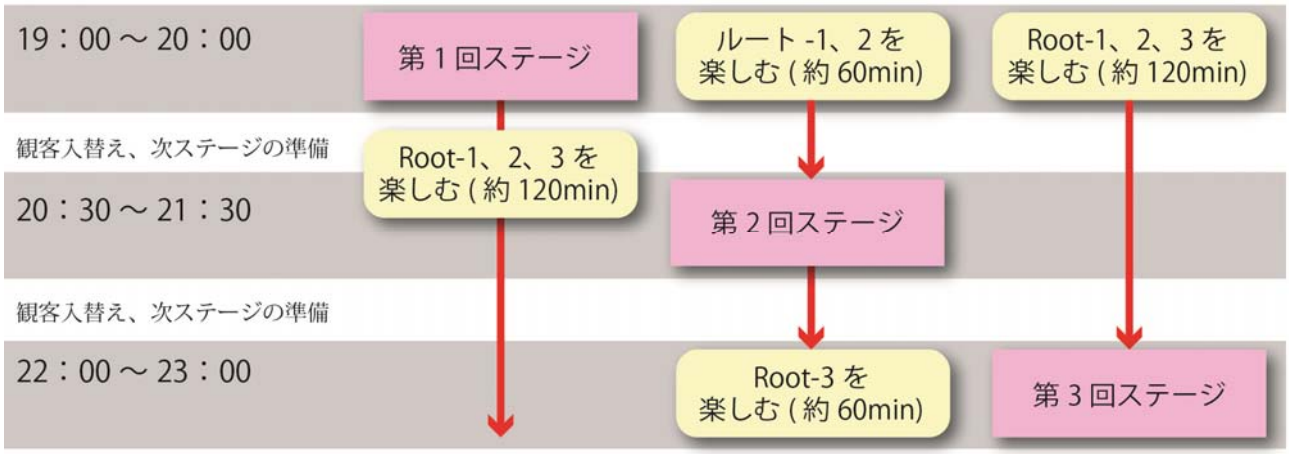
ゴリラ、オランウータン、テナガザル、クモザル等

【施設整備等】

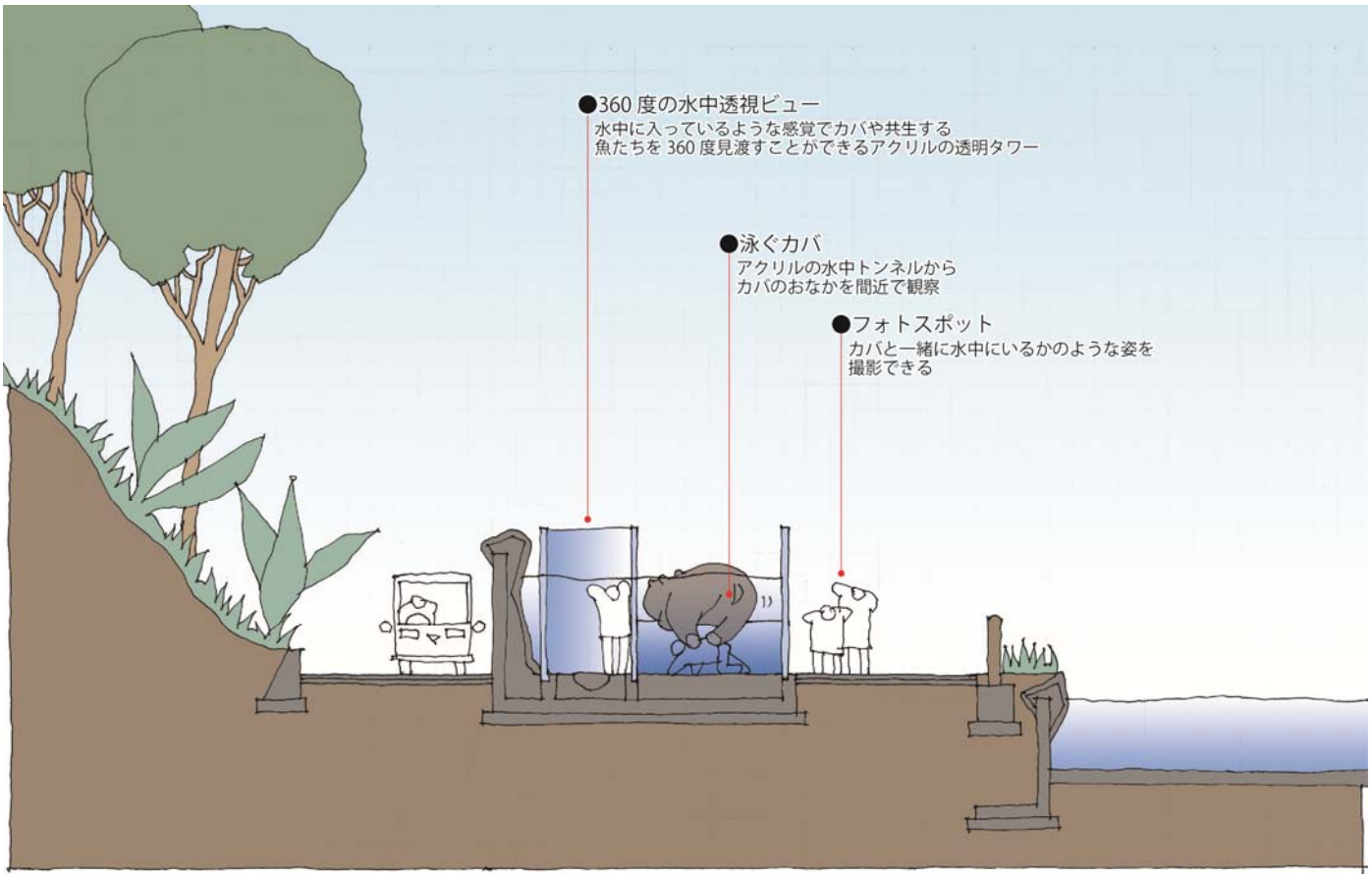
・ナイトズ―に向けた施設整備として、照明設備の整備が挙げられるが、既存樹林の生物への影響や野生の夜の雰囲気演出に配慮し、足元灯程度を基本とする。（オプションとしてジャングル体験を演出するヘッドライトの販売を行うことも考えられる。）
・宿泊体験用地として、水辺に浮かぶ無人島や森に囲まれた平場を活用する。
・夜間利用のため藪蚊やハブ対策について、今後ソフト面も含め検討が必要である。

【オペレーション例】

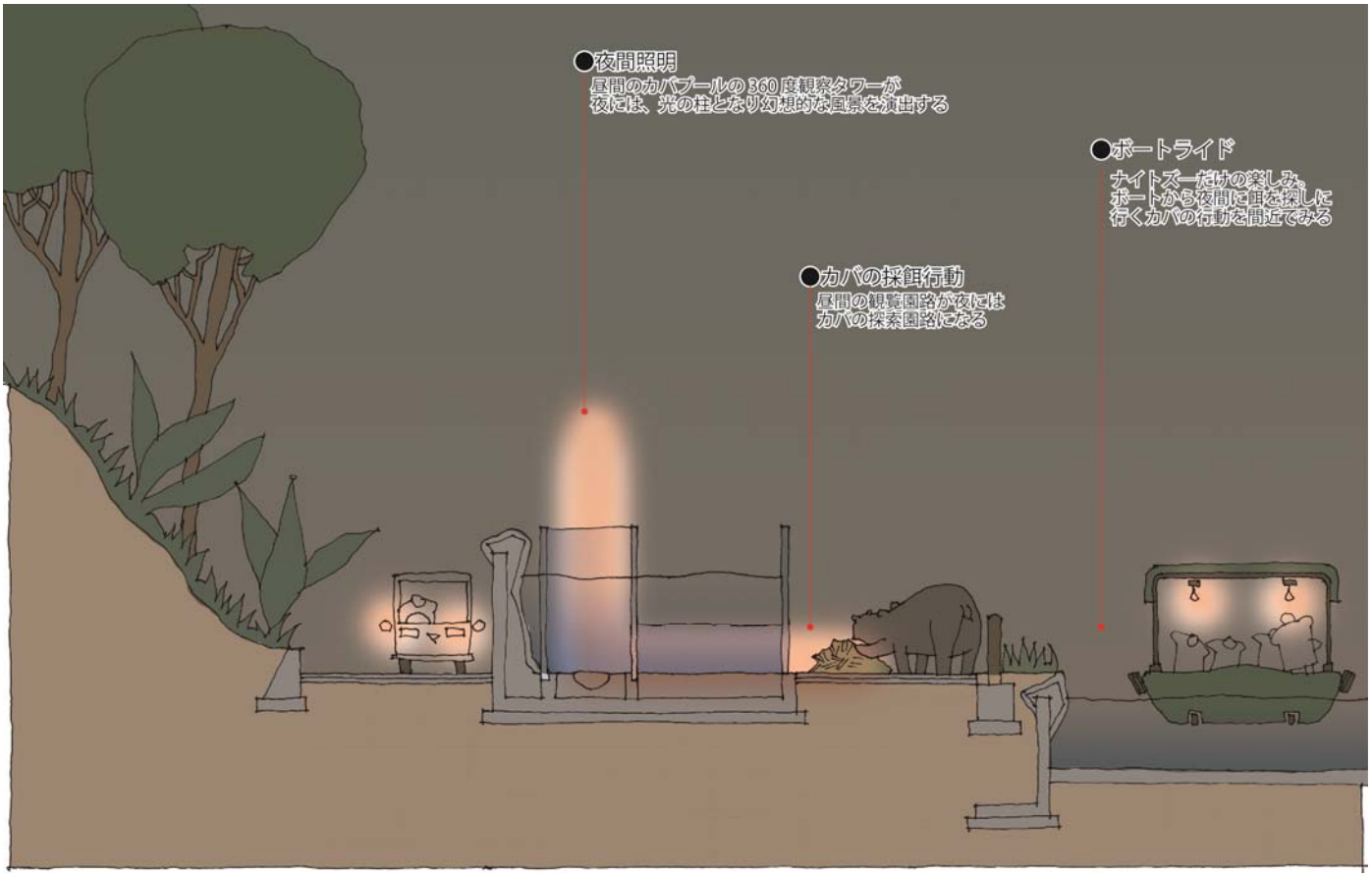
・ナイトズーの展開にあたっては、一般開園時間を 9：00～18：00 とし、夜間開園は 19：00～23：00（仮）とする。
・前述のストーリーに基づくナイトズーの所要時間は、約 120 分（2 時間）となる。
・ナイトズーの観覧とショーレストランとの時間配分例を以下に示す。



図：時間配分例



図：カバ展示昼間イメージパース



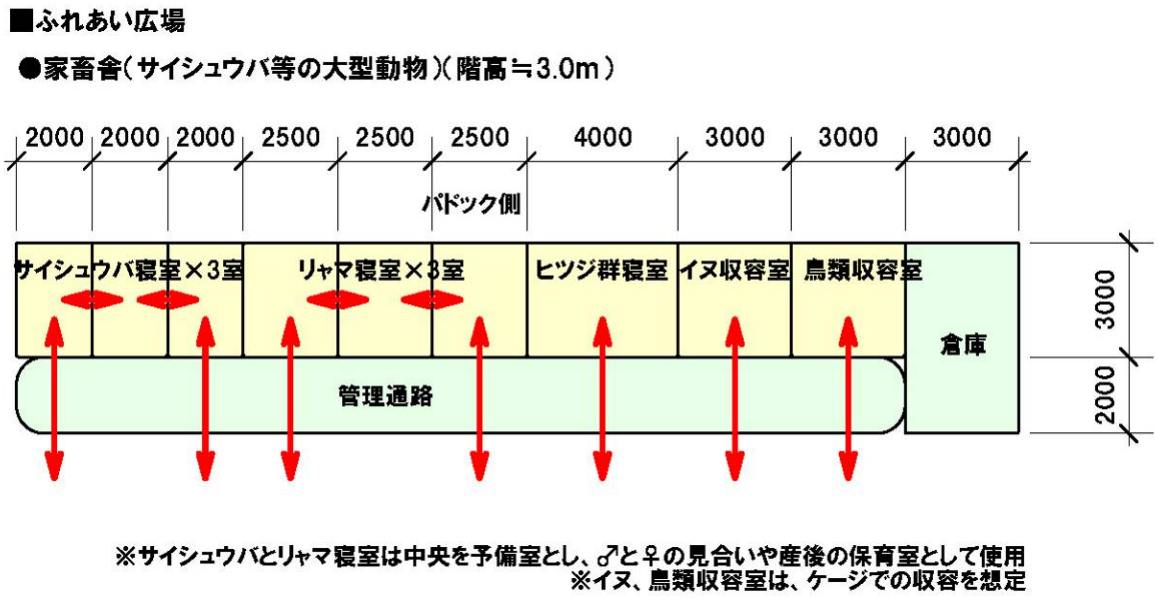
図：カバ展示夜間イメージパース

（４）動物収容施設計画

動物を収容する獣舎についての基本的な考え方を次のように設定し、施設配置等に影響する中型～大型動物の主要な獣舎について、その基本構成図を示す。

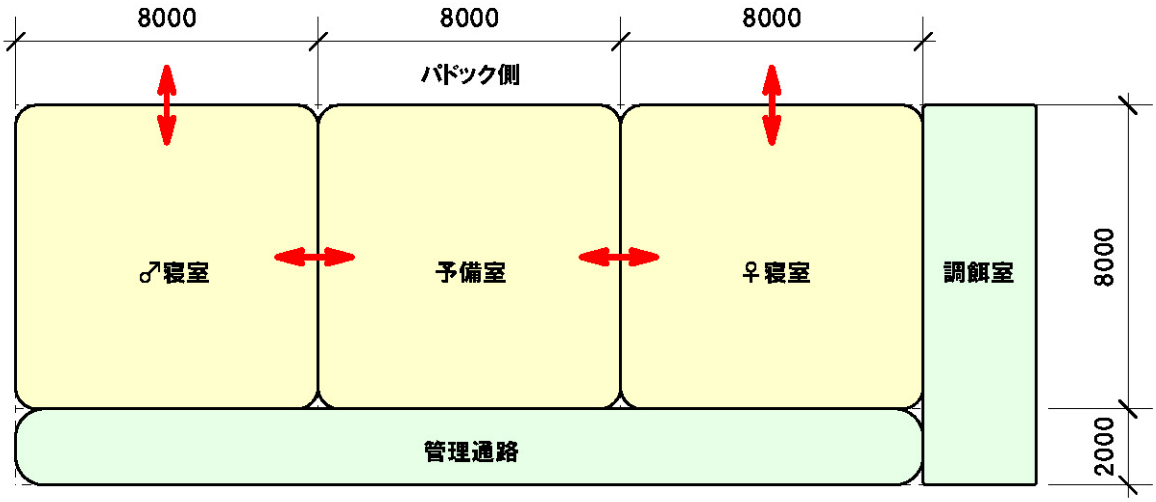
・種の保存に向けた取り組みを推進するため、繁殖を視野に入れた獣舎の諸室構成とする。
・上記の考えに基づく諸室構成として、雄用寝室と雌用寝室を少なくとも各１室確保し、お見合いや産室として、また群れで生息する動物については、はぐれ個体の隔離室として利用できる予備室を設ける。
・肉食獣については、各獣舎内で餌の解凍や切断、調合、計量等ができる調餌室を確保し、草食獣については、餌の保管ができる乾草庫を備えるものとする。

【日本の自然ゾーン】



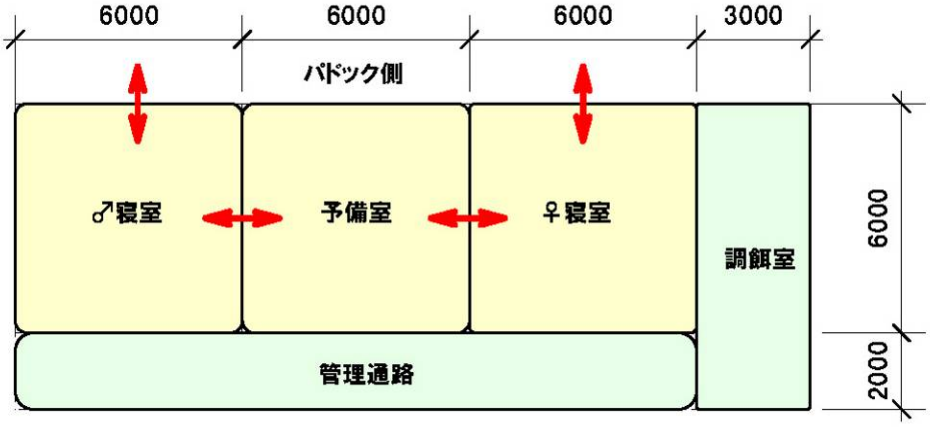
【ジャングルゾーン】：カモフラージュの森

●ベンガルトラ舎（階高≒4.5m）



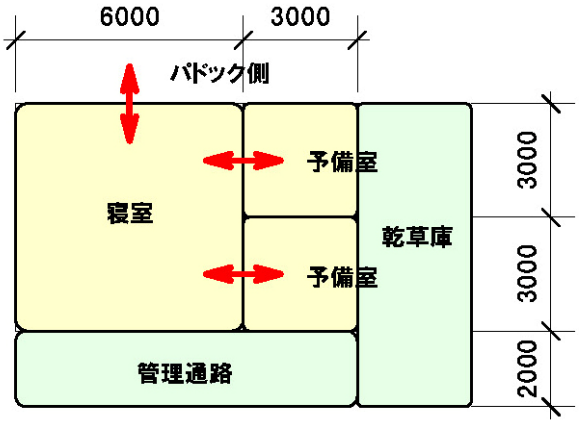
※予備室は、♂と♀の見合いや産後の保育室としても使用

●ジャガー舎（階高≒4.5m）



※予備室は、♂と♀の見合いや産後の保育室としても使用

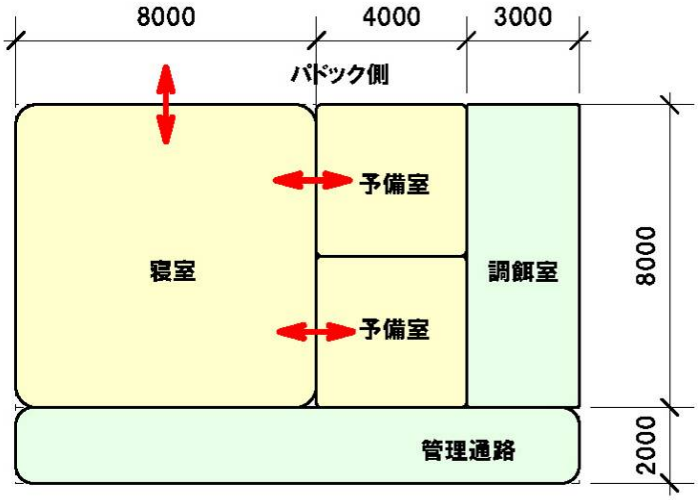
●アクシスジカ舎（階高≒3.0m）



※予備室は、傷病個体やはぐれ個体の隔離室として使用

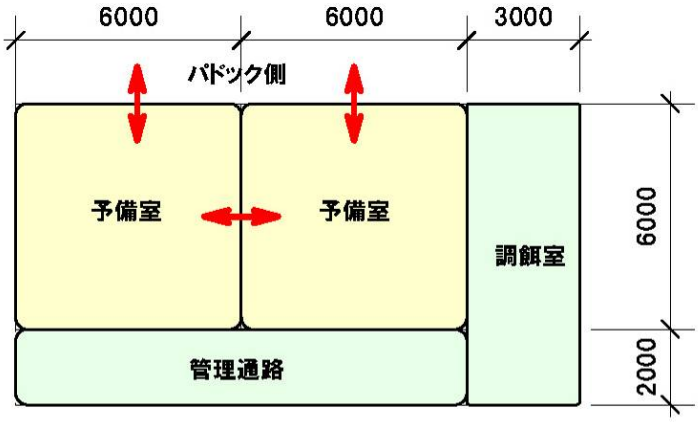
【ジャングルゾーン】：サルの森

●ゴリラ舎（階高≒4.5m）



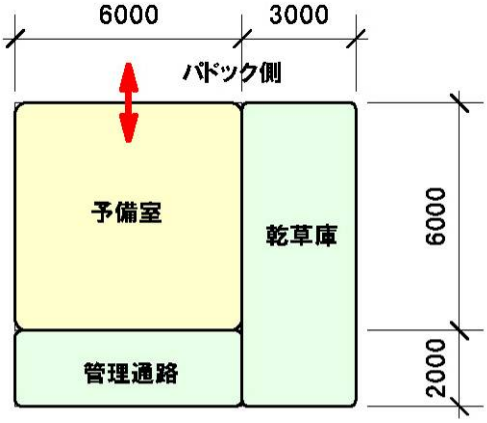
※予備室は、産後の保育室としても使用

●チンパンジー舎およびオランウータン舎（階高≒4.5m）



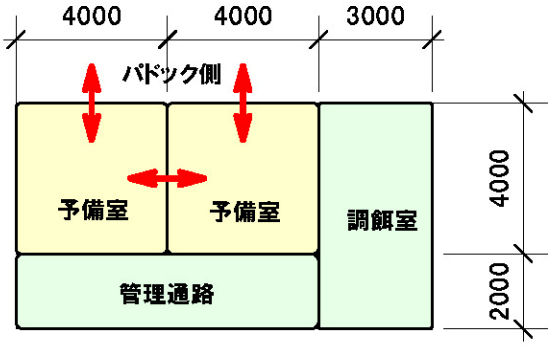
※ケージでの飼育を基本とし、予備室は傷病個体等の避難場所として使用

●テナガザル舎（階高≒4.5m）



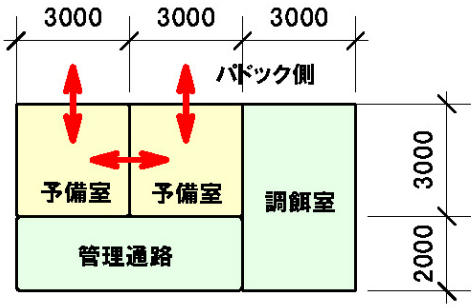
※ケージでの飼育を基本とし、予備室は傷病個体等の避難場所として使用

●マンドリル、ヒヒ舎（階高≒4.5m）



※ケージでの飼育を基本とし、予備室は傷病個体等の避難場所として使用

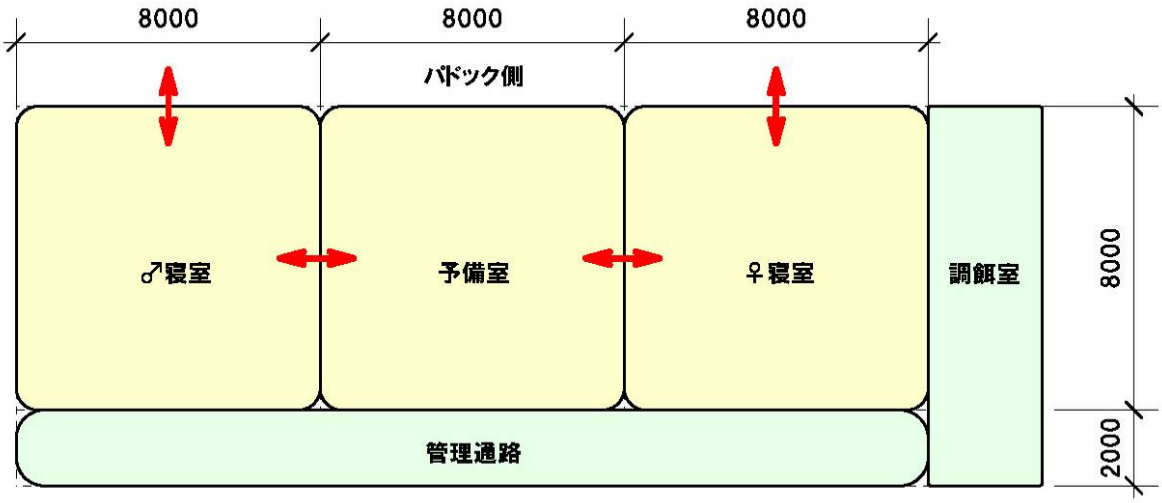
●中型サル舎（キツネザル、クモザル）（階高≒4.5m）



※ケージでの飼育を基本とし、予備室は傷病個体等の避難場所として使用

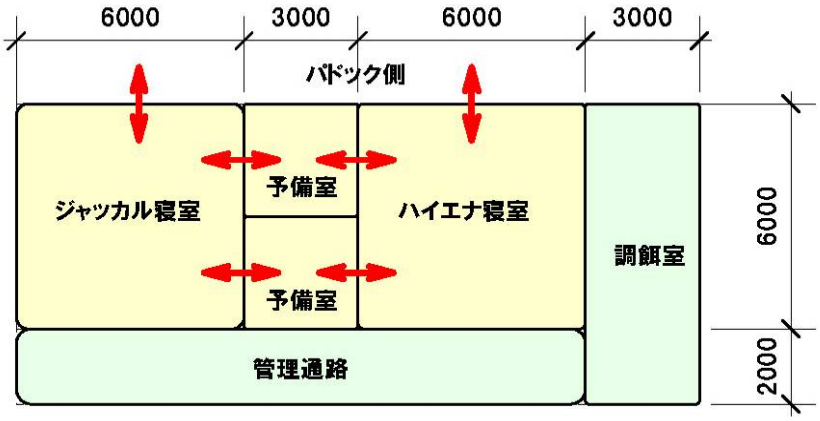
【草原の動物ゾーン】：肉食獣の多様性

●（ホワイト）ライオン舎（階高≒4.5m）



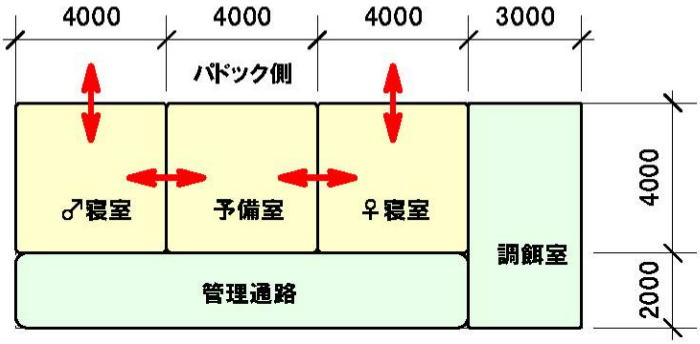
※予備室は、♂と♀の見合いや産後の保育室としても使用

●ジャッカル、ハイエナ舎（階高≒3.0m）



※予備室は、隣接する寝室から供用可能

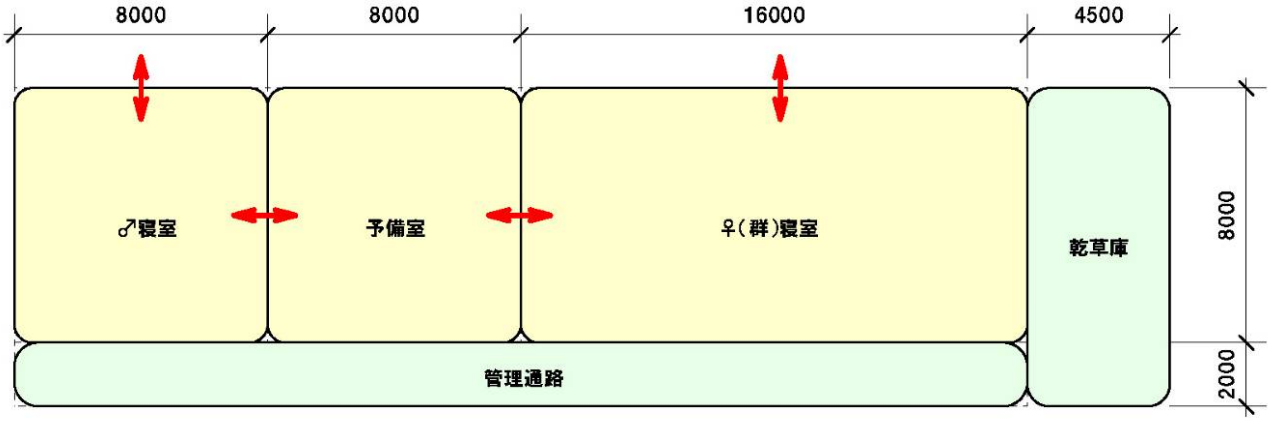
●チーター舎（階高≒4.5m）



※予備室は、♂と♀の見合いや産後の保育室としても使用

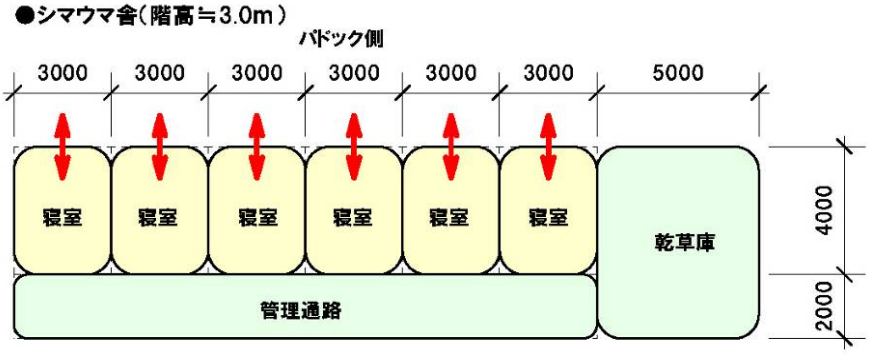
【草原の動物ゾーン】：草食獣の群れ

●アミメキリン舎（階高≒8.0m）



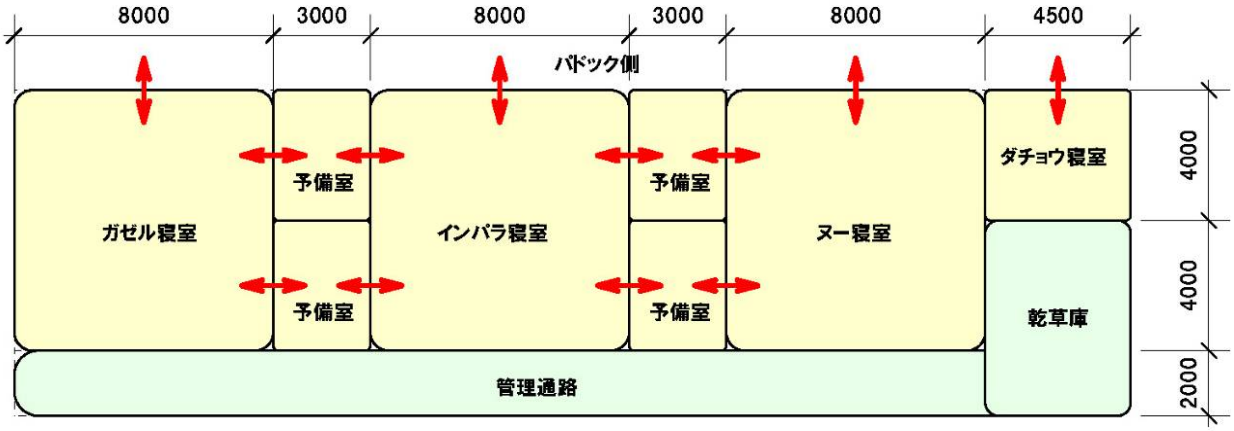
※予備室は、♂と♀の見合いや産後の保育室としても使用

●シマウマ舎（階高≒3.0m）



※予備室は、♂と♀の見合いや産後の保育室としても使用

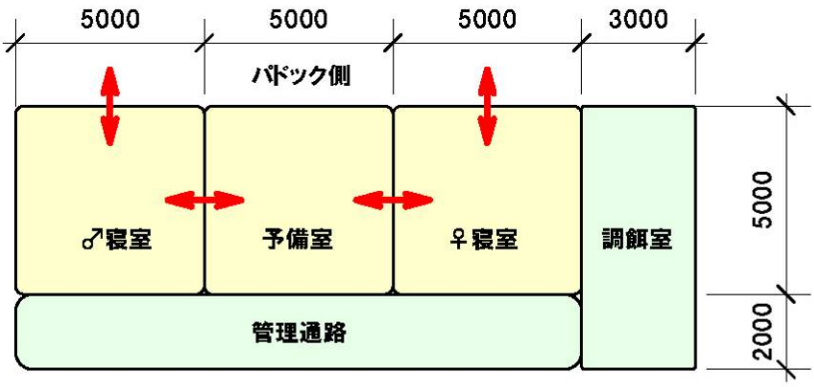
●ガゼル、インパラ、ヌー、ダチョウ舎（階高≒3.0m）



※予備室は、隣接する寝室から供用可能

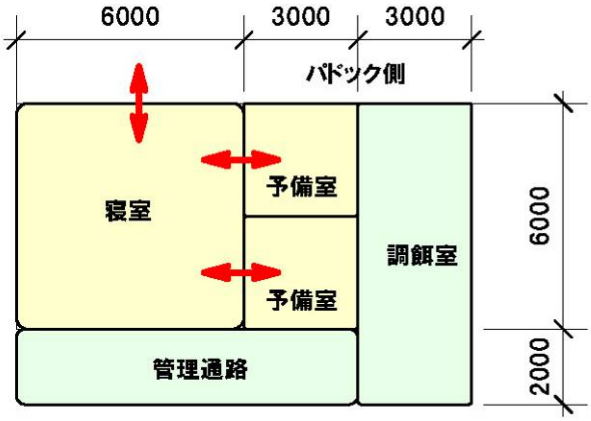
【草原の動物ゾーン】：草食獣の群れ

●サイ舎（階高≒3.0m）



※予備室は、♂と♀の見合いや産後の保育室としても使用

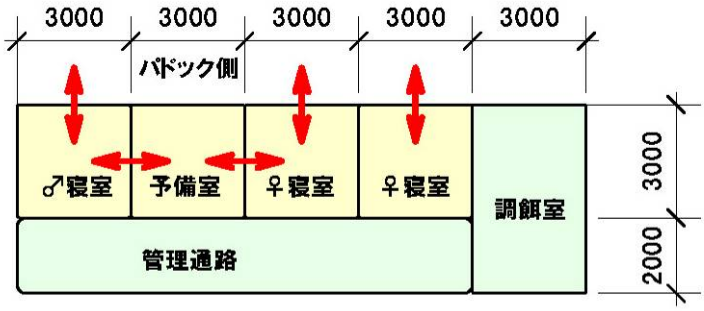
●オオカンガルー舎（階高≒3.0m）



※予備室は、傷病個体やはぐれ個体の隔離室として使用

【草原の動物ゾーン】：草食獣の群れ・肉食獣の多様性

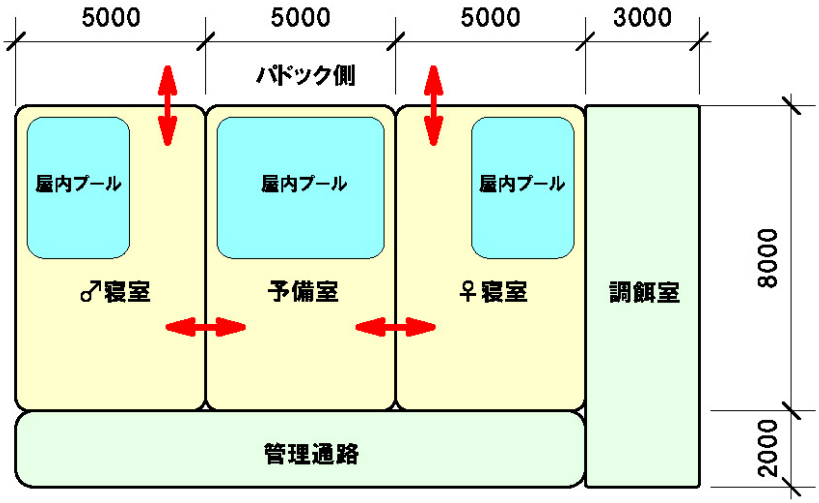
●オオアリクイ舎（階高≒3.0m）



※予備室は、♂と♀の見合いや産後の保育室としても使用

【水辺の動物ゾーン】：生命の池

●カバ舎（階高≒3.0m）



※予備室は、♂と♀の見合いや産後の保育室としても使用